

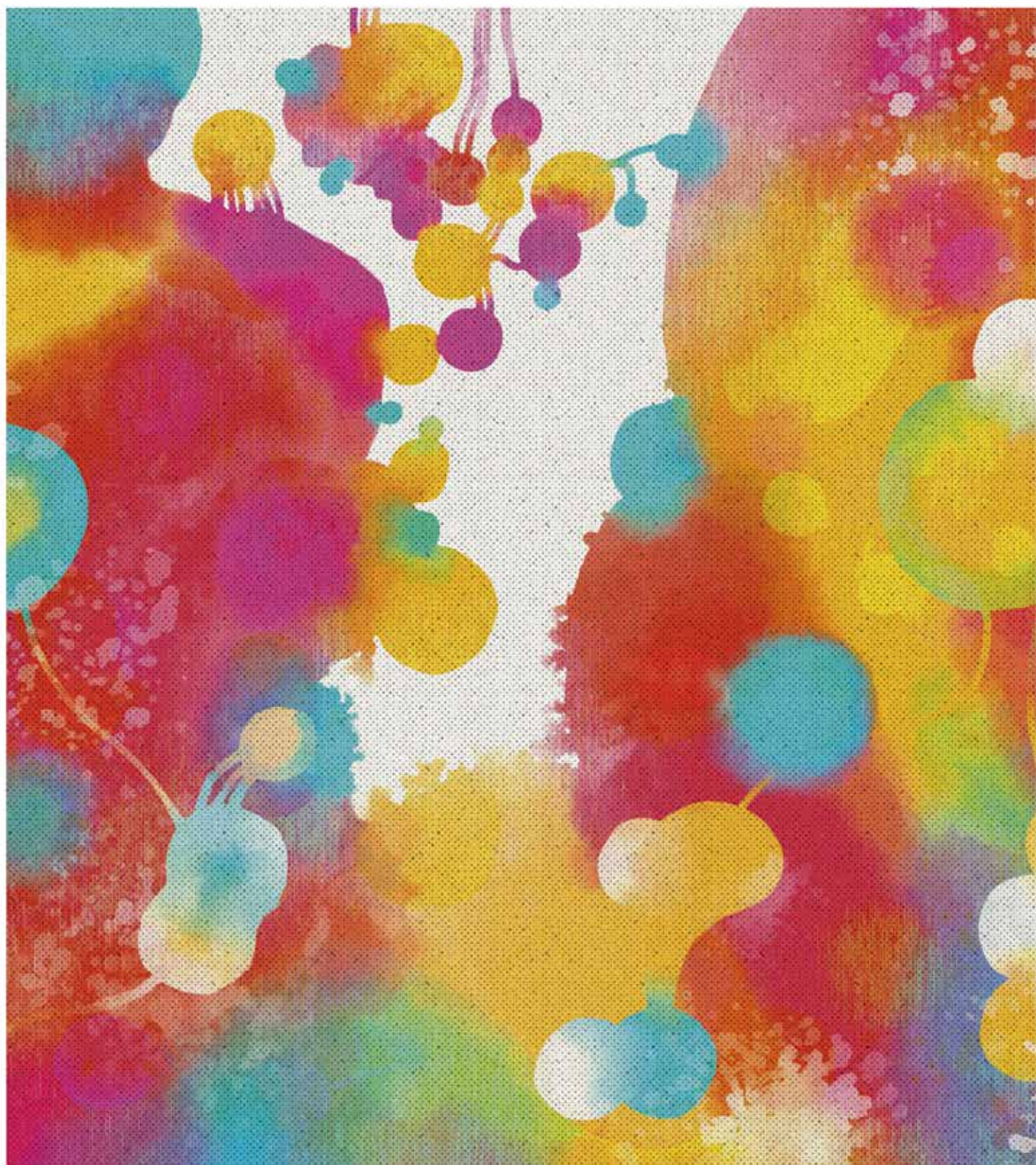
東京学芸大学 辟雍会 機関誌

Hekiyou



辟雍

2024 vol.21



東京学芸大学 辞職会 機関誌

Hekiyou

2024 vol.21

目次

● 会長挨拶	馬淵 貞利	2
● 沿革		3
● 支部設立状況・支部便り		4
● 支部連絡先一覧		11
● 会員から①	藤井 英一	12
● 会員から②	中庭 雅行	14
● パリオリンピック活躍の卒業生	角田 夏実	16
● パリパラオリンピック活躍の卒業生	西田 杏	18
● 辞職会創立 20 周年記念特別企画	河添 房江	20
● 辞職会創立 20 周年記念祝賀会	國分 充	22
	岡本 靖正	23
● 特別寄稿	荒尾 禎秀	24
● 東京学芸大学と辞職会の共催事業		28
	橋本 花 マリノ・リユーカー 新井 沙希	
	平野 優人 伊藤 美結	
● 附属図書館に「教職支援コーナー」の開設		32
● 支部活動への支援		33
● 2024 年度各部活動報告		34
● あとがき		36



晩秋の農場風景・稲架（撮影：馬淵会長）（木の間の向こうに見えるのは
キャンパス内に建てられた「辻調理師専門学校東京」の校舎）

近い将来を見据えた活動を



馬淵 貞利

すでに後期高齢者の仲間入りをした私が会長職を再度お引き受けするのは、いささか躊躇するところもありましたが、こうして皆さまにご挨拶できることを嬉しく思います。折しも今年は、日本国民の5人に1人が後期高齢者となり、3人に1人が65歳以上の高齢者になるという、いわゆる「2025年問題」に直面する年に当たります。「社会保障費の増大」、「医療・介護体制の困難化」、「労働力不足の深刻化」などが急速に進行し、シルバー人材の活用も不可欠な時代になってまいりました。とはいえ私の前にある大きな課題に思いを致す時、その荷の重さに困惑しております。私の前には少なくとも次の2つの課題がその答えを促迫しているように思われます。

一つは、役員メンバーの高齢化が進んできた辟雍会でもそろそろ世代交代を考えるべき時期に来ており、それを会の発展につながるような形で進めていくという課題です。現役役員の方々には高いボランティア精神をもって献身的に活動していただいでいて、日々頭の下がる思いであります。こうした献身的活動を引き継いでいただける若い人びとが大勢名乗りを上げてくださることを私は切望しております。退職された方々に限りません。現役の教職員の方々や学生・院生の方々に積極的に辟雍会活動の推進役になっていただきたいと思っております。そして、さまざまな世代の志ある人びとが集う多彩で活力ある辟雍会にしていければと夢見ています。

二つ目の課題は、活動内容の面で、しっかりとした今後の活動基盤を築いていくということです。そのためには財政基盤の整備をはじめ、全ての都道府県に地方支部を完備する必要があります。それともう一つ、全ての構成員に向けた基本施策を整備することです。周知のように、辟雍会は東京学芸大学の全国同窓会であるとともに、現役の教職員や教職員OG、OBをも含めた「オール学芸の会」です。現役の学生・院生に対する支援が辟雍会の最重点課題であることは勿論ですが、全国の支部との連携をいっそう充実・強化することや、全ての構成員に対するきめ細かな活動方針を持つことによってはじめて辟雍会らしい全容が整います。

ところで、私たちが辟雍会活動を推進していくにあたって、中・長期的な展望を持つことも重要です。現在、辟雍会の事務所はとても良い場所に置かせて

いただいておりますが、辟雍会独自の「会館」を持つという構想も徐々に具体化していく必要があります。一方、活動内容の面でも、近い将来の日本の学校教育や教員養成系大学における学生支援の在り方を見据えた活動が求められます。私たちは、現在学芸大学で学ぶ学生たちが将来の日本の教育界を背負う人材として巣立っていけるように支援していきたいものです。ところが残念なことに、教職は不人気な職種の一つとされ、教員不足が各地で叫ばれるようになってきています。その背景をなす一因として、私たちは今日の教員養成大学・学部部の危機的状況を直視する必要があります。

目を学芸大学に転じてみますと、この十年余りの間に大学の正規教員の数が百人近く（3割近く）も削減されました。とくに甚だしいのは教科専門分野で、どの教科でも半減に近い状態になっています。現在、少子化が進んでいる東アジア各地で高学歴なモンスターペアレントへの対応が話題になっていますが、こうした問題に毅然と対応するためにも、教師が自分の専門的能力に対する確固たる自信を持っている必要があります。また、生徒のさまざまな能力を導き出すことが教育（education）という仕事であるとしたら、それに応えうる人材を養成する教員養成系大学は、教科専門性においても教員と学生の間の人間関係においても豊かな大学でなくてはなりません。しかし、それらが急速に失われようとしていることは、まさに危機的事態であると言っても過言ではありません。私たちは今、こうした特殊日本的な難局を学芸大学が乗り越えていけるように、支援の在り方を考えていかねばなりません。会員の皆さまのご協力をよろしくお願いいたします。

先日、メキシコ映画の至宝と称される「型破りな教室」という実話に基づく映画を見てきました。この作品は、暴力のはびこる貧しい国境地帯の町の小学校で、全国最下位の烙印を押された子供たちが、学ぶことの楽しさに気づくように苦闘する教師の姿を描いています。教職という職種の貴さをしみじみと感じさせてくれる名作です。

沿革

- 2003.11.03 (平成 15) 「辟雍会（東京学芸大学全国同窓会）」創立
- 2003.11.03 (平成 15) 荒尾禎秀会長就任
- 2003.12.07 (平成 15) 青森県支部設立
- 2005.07.02 (平成 17) 石川県支部設立
- 2005.08.22 (平成 17) 富山県支部設立
- 2005.10.01 (平成 17) 岩手県支部設立
- 2006.02.25 (平成 18) 千葉県支部設立
- 2006.04.01 (平成 18) 荒尾禎秀会長再任（2期目）
- 2006.10.01 (平成 18) 島根県支部設立
- 2007.06.24 (平成 19) 高知県支部設立
- 2008.04.01 (平成 20) 長谷川貞夫会長就任
- 2009.08.01 (平成 21) 北海道支部設立
- 2009.10.31 (平成 21) 東京学芸大学創立 60 周年記念シンポジウムを本学と共催
- 2010.04.01 (平成 22) 鷺山恭彦会長就任
- 2011.01.29 (平成 23) 岡山県支部設立
- 2011.02.27 (平成 23) 鳥取県支部設立
- 2011.03.26 (平成 23) 静岡県支部設立
- 2011.08.28 (平成 23) 新潟県支部設立
- 2011.10.30 (平成 23) 広島県支部設立
- 2011.11.26 (平成 23) 神奈川県支部設立
- 2012.04.01 (平成 24) 鷺山恭彦会長再任（2期目）
- 2012.08.17 (平成 24) 山梨県支部設立
- 2012.10.07 (平成 24) 鹿児島県支部設立
- 2013.07.27 (平成 25) 群馬県支部設立
- 2013.11.02 (平成 25) 本会を「東京学芸大学辟雍会」と改称
本会創立 10 周年記念祝賀会開催
- 2014.03.15 (平成 26) 佐賀県支部設立
- 2014.04.01 (平成 26) 鷺山恭彦会長再任（3期目）
- 2014.06.15 (平成 26) 栃木県支部設立
- 2014.10.11 (平成 26) 熊本県支部設立
- 2014.11.08 (平成 26) 大分県支部設立
- 2015.05.31 (平成 27) 埼玉県支部設立
- 2016.02.20 (平成 28) 宮崎県支部設立
- 2016.04.01 (平成 28) 馬淵貞利会長就任
- 2017.09.14 (平成 29) 韓国支部設立
- 2018.04.01 (平成 30) 馬淵貞利会長再任（2期目）
- 2018.08.17 (平成 30) 香川県支部設立
- 2019.08.30 (令和元) 福井県支部設立
- 2020.02.22 (令和2) 宮城県支部設立
- 2020.04.01 (令和2) 長谷川正会長就任
- 2022.04.01 (令和4) 長谷川正会長再任（2期目）
- 2023.04.01 (令和5) 兵庫県支部設立
- 2023.12.03 (令和5) 長野県支部設立
- 2024.04.01 (令和6) 馬淵貞利会長就任
- 2024.11.02 (令和6) 本会創立 20 周年記念祝賀会開催



番号	名称	設立年月日
1	青森県支部	2003.12.07 (平成 15)
2	石川県支部	2005.07.02 (平成 17)
3	富山県支部「獅子の会」	2005.08.22 (平成 17)
4	岩手県支部	2005.10.01 (平成 17)
5	千葉県支部	2006.02.25 (平成 18)
6	島根県支部	2006.10.01 (平成 18)
7	高知県支部「高知辟雍会」	2007.06.24 (平成 19)
8	北海道支部	2009.08.01 (平成 21)
9	岡山県支部「岡山辟雍会」	2011.01.29 (平成 23)
10	鳥取県支部	2011.02.27 (平成 23)
11	静岡県支部「静岡辟雍会」	2011.03.26 (平成 23)
12	新潟県支部	2011.08.28 (平成 23)
13	広島県支部「広島辟雍会」	2011.10.30 (平成 23)
14	神奈川県支部	2011.11.26 (平成 23)
15	山梨県支部	2012.08.17 (平成 24)

番号	名称	設立年月日
16	鹿児島県支部	2012.10.07 (平成 24)
17	群馬県支部「群馬辟雍会」	2013.07.27 (平成 25)
18	佐賀県支部	2014.03.15 (平成 26)
19	栃木県支部	2014.06.15 (平成 26)
20	熊本県支部	2014.10.11 (平成 26)
21	大分県支部	2014.11.08 (平成 26)
22	埼玉県支部	2015.05.31 (平成 27)
23	宮崎県支部	2016.02.20 (平成 28)
24	韓国支部「韓国辟雍会」	2017.09.14 (平成 29)
25	香川県支部	2018.08.17 (平成 30)
26	福井県支部	2019.08.30 (令和元)
27	宮城県支部	2020.02.22 (令和 2)
28	兵庫県支部	2023.04.01 (令和 5)
29	長野県支部	2023.12.03 (令和 5)

❁ 北海道 ❁

令和 6 年 8 月 3 日（土）、札幌にて今年度の総会（全国代表者会議内容の報告、収支決算など）に引き続き、4 年ぶりに懇親会を開催しました。和やかな雰囲気の中で、出席者による近況報告や大学時代の懐かしい思い出話、昨今の教育談義等で盛り上がり、たいへん有意義な時間を共有することができました。また、活動の大きな柱である支部便り「カムバックサーモン！」の発行は、コロナ禍による3年間の活動自粛期間も含めて継続してきましたが、同窓の方々の母校への思いやそれぞれのフィールドでの活躍ぶりを知ることができ、貴重な情報交流の機会として今後も継続して取り組んでいきたいと考えています。

一方、平成 21 年（2009 年）の支部設立から 15 年が経過し、活動を取り巻く状況も変わってきており、（1）総会・懇親会への出席者減少（2）通信費や諸経費の高騰に伴う運営財源の確保（3）異動・転居先等の確認の難しさなどが当面の課題となっています。

今後は、北海道の広域性も踏まえ、各地の特色ある郷土文化施設等を訪問する巡回型の事業や一般参加者も募った講演会（大学に縁のある講師による教育講話等）の開催など、新しい企画のアイデアを出し合いながら、会員の要望や時代の変化に対応した持続性のある支部活動を目指していきたいと思っています。

事務局長 中村 雅之

❁ 青森県 ❁

青森県支部は平成 15 年に第 1 号支部として設立し、県内在住の同窓生 74 名の会員で活動しております。毎年夏季には支部総会、冬季には懇親会を「青森市・八戸市・弘前市」の 3 市の持ち回りで開催し、会員の親交を深めています。

令和 6 年 1 月に八戸市で開催した懇親会では 25 名、7 月に弘前市で開催した支部総会では 15 名の会員が集いました。県内各地域での開催としては、各地域の会員の出席が増え、会合もより盛り上がるものとなりました。今回の支部総会では、大学卒業生が教員として県内に戻りやすい環境づくりとして、教員採用試験対策への支援も話題に上がりました。私自身、大学卒業後すぐに先輩に誘われて青森県支部の活動に参加してきました。緊張しながら参加した私も、諸先輩方のアットホームな温かい雰囲気に支えられて、教員としても社会人としても成長させてもらえたこの原

稿を書きながら感じています。大学卒業生への支援を始め、今後の支部の取り組みを充実したものとできるよう、事務局を中心に企画していきたいと思っています。

事務局長 今 捷覚
(平成 26 年 A 類保健体育選修卒)



令和 6 年懇親会 八戸にて

❁ 宮城県 ❁

辟雍会宮城県支部は、「会員相互の親睦を図るとともに、広く教育及び文化の振興・発展に寄与すること」を目的に、2020（令和 2）年 2 月 22 日に宮城辟雍会として設立されました。現在、会員数は 30 名を超え、毎年新会員が増えています。

設立時はコロナ禍の真っ只中で、突然の休校措置等により学校も大混乱でしたが、学校教育の在り方を様々な側面から見直すきっかけにもなり、「ピンチ」を「チャンス」に変える取組が始まった頃でした。それ以来、私たちは現職・退職の別なく、東京学芸大学の同窓という絆のもと教育の現状を見定め、よりよき未来を語り合ってきました。

コロナ禍による中断を経て、今回で 3 回目となる総会・親睦会を 11 月 30 日に仙台市内で開催し、高橋会長による全国代表者会議および 20 周年記念講演の報告、会の運営についての協議に引き続き、2 名の新会員を歓迎して会員相互の親睦を深めました。小・中・高校の教員や管理職、行政教員、

退職 OB・OG など立場は様々ですが、学び舎と小金井や国分寺エリアでの暮らし、サークル活動やアルバイトで学んだ経験や人とのつながりの大切さ等、尽きない思い出と先を見据える熱き語りに、時はあっという間に経ちました。

今後も新たな会員を迎えてネットワークを広げ、チームワークを更に高めていくことを楽しみにしています。

事務局長 堤 英俊
(昭和 60 年 A 類学校教育科卒)



第 3 回辟雍会宮城県支部総会・懇親会

❁ 栃木県 ❁

辟雍会栃木県支部は、「栃木県の教育・文化・スポーツを支援する東京学芸大学同窓生の会」で、2014年に設立しました。今年は11年目です。支部総会・懇親会は、毎年、宇都宮市内で開催してきましたが、2024年からは、県北、県南（例えば足利市）など、各地域の市で開く試みを始めました。参加者は、栃木県内の幼稚園・保育園、小学校、中学校、高等学校、大学等の教育界で活躍中の先生、事務職員、教育委員会職員、県庁、市役所等の行政職員、市議会議員、刑務官、製麺屋さんに至るまで、様々です。東京学芸大学を卒業・修了して、栃木県内で活躍している方々が、楽しくおしゃべりして、和気あいあい、励まし合っています。栃木県内に住むすべての東京学芸大学卒業生・

修了生は、是非、下記にメールで、ご連絡ください。会合の案内等を送ります。
 辟雍会栃木県支部代表（辟雍会理事）：
 柏瀬 省五
 （連絡先）メールアドレス：
 shogoka@ca3.so-net.net.jp



❁ 神奈川県 ❁

本年度13年目を迎えた神奈川県支部は、11月2日に「支部総会」を小金井キャンパスで開催しました。萱野政徳会長をはじめ、参加者の近況報告をして、今後の支部会のあり方についても話し合いました。当日は、学生や卒業生を対象に教職等相談ブースを千葉県支部（石井康雄支部長）と共同で開設しました。在学生や卒業生に対しての情報発信を積極的に行って、さらには、大学への貢献について話し合うことができました。支部便りを21号まで発刊し、インターネットにて会員に配信し、支部FacebookやX、Instagramなどにも掲載しています。2025年度には、教員採用試験の2次対策会や、教職希望者との懇談ができる機会を、千葉県支部や埼玉県支部と共同して作りたいとも考えています。2025年度11月に開催予定の支部総会時には、職場における悩み事や、

うまくいった明るい話題をワイワイガヤガヤと話し合えるようにしたいと計画しています。支部SNSへのリンクはこのQRコードから繋がりますので是非コメントを添えて返信してください。



❁ 千葉県 ❁

千葉県支部は、船橋市やこの近隣の市町村に在住または勤務する卒業生の団体です。現在の会員数は36名で、県内の教職員や学校管理職の方、企業にお勤めの方、すでに退職され今でも教育に携わっている方など職種も年齢も様々になっています。毎年、市内から県内へと情報を伝達して会員の和を広げ、会員数を増やそうと考えています。

主な活動である定期総会懇親会では、会員の年齢差に関係なく、在学当時の思い出や卒業後から今日までの状況、近況報告などを交換しています。また、諸先輩からは、若手の会員の方々の悩みを受けたり、将来に対するアドバイスも行ったりしています。

大学卒業後は、それぞれが社会に独り立ちしていくわけですが、将来に対する希望など、上司に相談する前にアドバイスを受けるといったケースも出てきました。

県内には、私たち千葉県支部とは別に高校の管理職を中心とした先生方の団体もあります。千葉県支部へ入会希望の学生諸君は、下記の連絡先でお待ちしています。

千葉県支部会長

石井 康雄（元船橋市立金杉台小学校長）
 自宅住所：船橋市前貝塚町 1010-18
 電話番号：047-438-9380（自宅）
 090-3472-3788（携帯）



この度4年ぶりの総会懇親会の開催でした。会員数も増えてきました。石井は、事務局長から会長になりました。教育長や学芸大学名誉教授の参加もいただき、実りある会になりました。教員養成講座（通称 万ゼミ）の学生さんも教師になり、第一線で活躍しています。人から人へのつながりを大切に、今後も支部拡大を目指していきます。

❁ 長野県 ❁

辟雍会長長野県支部の会長を務めております昭和61年度卒業の曾我佳伸と申します。在学中はB類保健体育科、剣道部に所属しておりました。

本会は、令和5年12月3日（日）に事務局の新海健一郎先生、木下雅夫先生、平沢恵子先生の3名が中心となって総会を開催し立ち上がりました。当日は県下各地より12名の皆さんが参加し、「自分を一回り成長させた東京学芸大学、そして自分が教師となるきっかけつくれた東京学芸大学」に改めて感謝の気持ちを深めるとともに、出会った仲間と大学時代の思い出話を花を咲かせる心地良さを味わうことができました。最後に、来年も全員参加しようと誓いガッツポーズで写真をとって解散となりました。

本年度の総会は、12月1日に13名の皆さんが参加して行われました。参加者はさほど多くはありませんでしたが、会員への登録は昨年度参加し

た皆さんの呼びかけによって急増しました。大学卒業後に長野県において「私は東京学芸大学の卒業ですと、なかなか語れる機会が少なかった」という話題になりました。総会の最後には、「来年度のこの会には、一人5人は連れてこよう！」と決意を固め、解散いたしました。

辟雍会長長野県支部は発足したばかりのまだ小さな会ですが、参加した皆さんの卒業生への地道な働きかけによって、胸を張って「私も東京学芸大学出身です」と語り合えるような仲間が長野県中に広がっていくことを信じております。

支部長 曾我 佳伸



富山県

富山県の「獅子の会（辟雍会富山県支部）」は、昭和50年頃に、富山市小学校教育研究会体育部会に偶然集まった数名の仲間の不定期な集まりから始まったそうです。その後、平成2年に規約と名簿を作成し、確認できた県内の卒業生全員に案内して総会・懇親会を開催して以来、毎年集まって親交を深めています。現在、県内在住の名簿掲載者は約300名となっています。

例年、8月下旬に総会・懇親会を開催しています。参加者は仕事も年代も様々ですが、歓談する中でサークルが同じだったり下宿が近所だったり、同じ年代を同じキャンパスで過ごしたというだけで共通の話題が生まれ、旧知の間柄のように話が弾みます。大学の特性上、教員が多いので

が、放送局の方や議員等職種も様々で、参加者全員が、あの日に戻れる貴重な場となっています。会の締めくくりは、いつも参加者全員が輪になって「若草もゆる」を歌います。学生時代にはほとんど歌うことがなかったこの歌を、この会に参加することで覚えたという方もたくさんおられます。そして、数年前に作成した獅子の会の旗のもとで写真を撮影して会を閉じます。

令和2年以降は、コロナ禍のため会は開催できておりませんが、来年度はぜひ開催し、この会の絆を大切に、未永く会を育てていきたいと思っています。

事務局 草野剛
(平成2年 国語科卒)

岡山県

令和6年2月3日（土）に第12回東京学芸大学岡山辟雍会を開催しました。

まだ、コロナやインフルエンザ等の影響があり、当日の欠席等もあり9名の参加ではありましたが懐かしく楽しいひとときを過ごすことができました。今回、久しぶりに岡山大学の原先生にも参加していただきました。来年は、20名以上の参加を目指して企画していきたいと思っています。また新たな出会いがあることを期待しています。

また、野球部のOB会で昨年12月に学芸大学を訪れた際、「岡山県木の松」が大きく成長している姿を見ることができ、大変うれしく思いました。この松は、平成29年に学芸大から植樹の依頼があり、正門横の20周年記念飯島同窓会館に植樹されている岡山の「醍醐桜」とともに、送らせていただいたものです。昨年の辟雍 vol.20 にも取り上げていただいておりますが、想像以上に大きく成



長しており、大切に管理していただいていることに感謝します。

このようなご時世で、皆様なかなかお忙しく、小中高大そして会社のそれぞれの行事もあり、日をあわせるのが難しい状況です。皆様のご意見をお聞きし、できるだけ大勢の方が参加していただける時期に会を開催できるように、尽力していきたいと思っています。

事務局長 宰相 裕一



鳥取県

8月8日（木）に鳥取県米子市において辟雍会鳥取県の支部総会兼「小澤一郎理事を囲む会」が開催されました。この会は、例年、冬季に開催しておりますが、辟雍会小澤一郎理事が学会にて来県されたことに合わせて行われました。

小澤理事が挨拶の冒頭で、辟雍会馬淵貞利会長の挨拶を代読されました。そのなかには、「前回、貴支部総会に参加した際には、貴支部が西部・中部・東部の三地区輪番で支部総会を開催し、支部運営に多くの方々や並々ならぬ努力を注いでおられることを知り、深く感銘を受けて帰ってまいりました。」とあり、本県の活動をしっかりとご記憶くださっていたことに集まった会員一同、大変感銘を受けました。また、本支部小椋博幸会長からも歓迎の挨拶がありました。

その後は、本学の卒業生である角田夏実さんがロンドンオリンピックで金メダルを獲得したことなど学芸大の今について小澤理事からお話をいただきました。小澤理事の温かなお人柄も

あって、終始和やかで笑いの絶えない会となりました。また、近況を紹介しながら会員相互の親睦もしっかりと図ることができました。

今回は、当日までの時間がなく、会員への十分な案内ができませんでした。そのため、参加者が少なく小澤理事には申し訳ないことをしました。

現在、会員は約130名です。今後、三地区での懇親会と全体での総会を予定しております。たくさんの会員で懇親を深めていきたいと思っています。

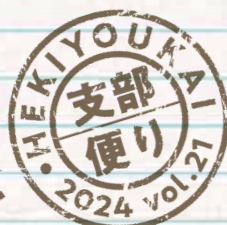


大分県

次の10年の節目に向けてスタート開始。
～ほっとするつながりの「おんせん県おおいた」～

平成26年に大分辟雍会が設立されてから今年で10年が経過し、いよいよ次の10年のステップとなる11年目がスタートしました。設立当初5名の会員が現在では40名を超える会員の方々や連絡を取り合えるようになりました。昨年に引き続き、対面での総会の開催ができることとなり今年、再開2回目として1月25日に大分市のアートホテル大分におきまして第11回総会及び懇親会を開催することができました。19名の同窓生が集い、再会の思いやそれぞれの大学時代の思い出話を語り合いながら、限られた時間の中でしたが楽しい交流ができました。辟雍会事務局からお忙しい中、ご来賓として、馬淵貞利会長様と後藤満幹様をお迎えするとともに、本学から小嶋茂稔副学長様、をお迎えし、辟雍会の取組についてのお話と合わせ、本支部の活動へのねぎらいのお

言葉を更に進化し続ける本学の様子等のお話をいただきました。懇親会の中では、お互いの近況報告の紹介や年代を超えた懐かしい大学時代のエピソードから郷土の話題まで広がり、時間を忘れてしまうほどの会となりました。短い時間ではありましたが、参加された会員さん方は、次回参加の約束もし合いながら親睦を深め、楽しいひと時を過ごすことができました。他支部の皆様も、「田舎暮らし日本一のおおいた、おんせん県おおいた」の魅力を発見してみませんか。そして、九州への旅の途中には是非お立ち寄り下さい。



香川県

辟雍会香川支部は、令和6年12月21日に第4回総会・懇親会を開催しました。

今年は13名の方が参加してくださり、今回は初参加の方もいらっしゃいました。初参加の方から自己紹介をいただく中で、東京学芸大学付近の飲食店や武蔵小金井駅、国分寺駅の名前が挙がると、みなさんの思い出もよみがえり、懐かしい話に花が咲きました。

本支部は年齢層も幅広く、部活動やサークルの話でも盛り上がります。今回の懇親会で、思いがけず部活動の先輩、後輩と出会えた方もおいでたようでした。また、入試の日の思い出話では、宿泊施設に苦労した話、実技試験での失敗談など、

今では笑い話となるような経験談が飛び交いました。年末の忙しい時期でしたが、集まってくださった皆様、ありがとうございました。また、今回は残念ながら参加できなかった方からも、多くの声をかけていただきました。感謝申し上げます。

校種も職種も様々な私たちですが、この年に一度の懇親会ではお互いの近況報告や懐かしいエピソードを語り合い、楽しいひとときを過ごしています。まだまだお会いできていない方もおいでるようなので、今後さらに大勢の方に参加していただけるよう、尽力していきたいと考えています。皆様からのご連絡をお待ちしております。

監事 岡田 彩友美

高知県

高知県に在住されている方で、この「支部だより」のスペースを読まれた方は、支部長の宮地が事務局の中山のメールアドレスまたは携帯電話まで連絡をいただきたいです。また、高知県内の学芸大卒業生所在の情報がある場合にも連絡をください。

過去に実施した懇親会参加者は次の方々です。1974年卒D類保体科 宮地彌典（高知支部長）、1975年卒D類書道科 大西正子、1977年卒D類保体科 柚村 誠（副支部長）、1977年卒D類美術科 西 緑、1985年卒D類数学科 黒瀬忠行、1988年A類保体科 宇賀孝篤（副支部長）、1988年卒A類理科 若江卓恭、1989年卒D類保体科

西内一人、1992年卒N類生涯スポーツ科 池添伊佐子、1994年卒A類数学科 田所良夫、1990年卒B類数学科 松山 幸、1990年卒D類数学科 中山泰志

[支部長] 宮地彌典（1973年度卒 D類保体科）

TEL:090-5911-5088

メールアドレス : m-hiroshuke @ miyajigakuen.jp

[副支部長] 柚村 誠（1977年度卒 D類保体科）

宇賀孝篤（1988年度卒 A類保体科）

[事務局] 中山泰志（1990年度卒 D類数学科）

TEL:090-4976-9220

メールアドレス : k_kobun4769 @ docomo.ne.jp

佐賀県

こんにちは。佐賀支部です。メンバーの増減はさほど多くはないのですが、メンバー全員がちょうど学校であったり、会社であったり、大変忙しい立場になって、なかなか近況報告も滞っておりました。SNSを利用して、全国代表者会議の議事録などを共有したところ、皆さん、なかなか集まらない数年の中で、新たな辟雍会メンバーを見つけたり佐賀の良いところを発信していたりして、

各自でつながりを意識した個々の取り組みが充実してきていました。毎年私の研修会（佐賀大学）を受けてくださる辟雍会メンバーもいたりして、そろそろ6年ぶりの支部総会を開催する運びになりそうです。

事務局長 小松原 修



東京学芸大学辟雍会支部連絡先一覧（2024年9月現在）

①北海道支部 連絡先 中村 雅之

TEL : 090-2874-2945 E-mail : m-nakamura1125@outlook.jp
カムバック・サーモン！
北の大地（北海道）は、皆さんの凱旋を待ってまーす。

②青森県支部 連絡先 今 捷覚

TEL : 090-8781-7482 E-mail : hekiyoukai.aomori@gmail.com
学芸大青森キャンパスでは、同窓生が楽しく友好を深めています。夢の続きを青森で。まずは連絡ください。

③岩手県支部 連絡先 中村 和平

TEL 090-8928-9837 E-mail : nakazohira8@gmail.com
世界で活躍するアスリートを生み育てた故郷岩手で、一緒に可能性豊かな児童生徒の夢実現の応援をしましょう。

④宮城県支部 連絡先 堤 英俊

TEL : 090-5351-1602 E-mail : hekiyou.miyagi@gmail.com
卒業・修了おめでとうございます。
宮城の教育のために はやくこっちゃん来てがんばってけれ!!

⑤栃木県支部 連絡先 柏瀬 省五（かしわけしょうご）

TEL : 0284-62-6229 E-mail : shogoka@ca3.so-net.ne.jp
故郷へのUターン、心から歓迎。故郷の教育、文化、スポーツ、みんなで楽しみながら、発展させよう。待ってるからね！

⑥群馬県支部 連絡先 須永 智

TEL 0270-64-6861 E-mail : sunagashishi@gmail.com
群馬県支部では、夏を目処に、支部総会・懇親会を予定しています。卒業生は学校に一人ない二人です。ぜひ、横のつながりを作ってください。

⑦埼玉県支部 連絡先 阿部 博之

TEL : 048-862-6857 E-mail : h-abe618@xa2.so-net.ne.jp
「こころ、咲いたまます。」こころを通じ合い、ネットワークを広げていきましょう！気軽に連絡してください。

⑧千葉県支部 連絡先 石井 康雄

TEL : 090-3472-3788, 047-438-9380 E-mail : ishaso.fuki@gmail.com
千葉県では、君達の先輩が大勢がんばっています。そこで、皆さんの力、ネットワークが必要です。加入をお待ちしています。

⑨神奈川県支部 連絡先 原 英喜

TEL : 090-9800-5831 E-mail : oyo5.hhara@gmail.com
生きる学び続けた日々、これからは社会に通ずる人として歩む道になります。「一日一生」を心して優しく優しく優しく優しくね。

⑩山梨県支部 連絡先 鮎澤 謙

TEL : 080-1217-1364 E-mail : yayuzawa@outlook.jp
会員の輪をさらに広げ、楽しく集いたいと思っています。気軽に連絡くださいね！

⑪長野県支部 連絡先 新海 健一郎

TEL : 090-8329-3346 E-mail : jkmCM472@gmail.com
あんなー、東京学芸大学は自分を一回り成長させてくれた生みの親だ、有志集まりまい、楽しいよ。

⑫新潟県支部 連絡先 玉木 浩

TEL : 090-9741-7520 E-mail : h01tamaki@yahoo.co.jp
新潟は、おめさん方を待ってる。～越後に輝く獅子の星座のもと、集い、語り、絆を深めよう～

⑬富山県支部「獅子の会」連絡先 草野 剛

TEL : 090-4681-1079 E-mail : kusanots0521@docomo.ne.jp
富山では280人以上の方ががんばってるよ。
富山に戻るときには連絡しられ。まっとうちゃ。

⑭石川県支部 連絡先 井表 照雄

TEL : 080-4250-4372 E-mail : ihyo0525@gmail.com
ふるさとは、あなたの帰りを待ってるよ。新幹線かがやきで帰ってきまっし！

⑮福井県支部 連絡先 小林弥寿夫

TEL : 090-8704-7562 E-mail : y-koba2020@lime.plala.or.jp
北陸新幹線、敦賀まで延伸！ 東京から一本で帰省できるようになったの、みんな待っているぞあ

⑯静岡県支部 連絡先 大石 茂生

TEL : 090-2617-7616 E-mail : shigeo-yasuko02@za.tnc.ne.jp
ご卒業おめでとうございます。静岡県の子供たちのために私たちが一緒に頑張りましょう。ぜひ辟雍会にご入会ください。

⑰兵庫県支部 連絡先 里 昭憲

TEL : 090-5654-3024 E-mail : kurosan19@gmail.com
卒業おめでとうございます。卒業生一同、みんなまっとうで！いっしょにがんばりましょう！

⑱鳥取県支部 連絡先 石名 勝実

TEL : 090-8605-8455 E-mail : gakugeti.tottori31@gmail.com
県人会発足から34年。鬼太郎、コナン、ジローが、あなたの帰りを待っています。まずはご連絡ください。

⑲島根県支部 連絡先 玉林 尚之

TEL : 090-4579-0034 E-mail : tamarin511@sky.megaegg.ne.jp
出雲の社、石見の山と川、ふるさと島根は若い力を待っちゃよーよ。帰って来んざったら連絡ごいてね。

⑳岡山県支部 連絡先 宰相 裕一（さいしょうひろかず）

TEL : 090-3746-8807 E-mail : uzusai@gmail.com
晴れの国岡山で待つとるけーなー！ 帰ってきたら連絡してよーよ。美味しい肉や魚や野菜や果物をみーんなで、食べよーやー。楽しみにしてとるで。

㉑広島県支部 連絡先 田中 信也

TEL : 090-4806-7177 E-mail : s_tanaka@hiroshimaymca.org
広島に戻ったときはぜひ連絡を。個性豊かな先輩たちがお待ちしております。

㉒香川県支部 連絡先 原 彪（はら たけし）

TEL : 090-8699-3434 E-mail : st-hara1128@ma.pikara.ne.jp
大学4年間で身につけた君たちの力をぜひ故郷で発揮して、みんなで住みやすい香川県を築いていこう。多くの先輩たちもいて支部の会をつくっています。卒業して帰郷したら必ず私に電話してください。待つとるけん。

㉓高知県支部 連絡先 中山 泰志

TEL : 090-4976-9220 E-mail : k_kobun4769@docomo.ne.jp
高知県出身者はもちろんのこと、高知県で働いてみたい方、是非連絡をください。みなさんを学大卒業生一同お待ちしております。

㉔佐賀県支部 連絡先 小松原 修

TEL : 090-1089-8832 E-mail : samukomatsubara@yahoo.co.jp
教育に携わる卒業生とマスコミに携わる卒業生でがばい調和がとれています。バルーンに乗って同窓会してます！

㉕熊本県支部 連絡先 藤田 まり子

TEL : 090-2503-9982 E-mail : fujimari5512@gmail.com
阿蘇に負けんパワーと、天草の海のごて綺麗な心で、熊本の学校を元気にすつためにがんばるとるばい！

㉖大分県支部 連絡先 瀬口 卓士

TEL : 090-9070-2962 E-mail : seguchi-takuji@oen.ed.jp
「田舎暮らし日本一」を目指して、しらしけん大分を元気にしよう。わーけえ先輩もだーね増えて、みんな40名こえたんで。心も体もあつたまる温泉県にもどつたら、いつでん連絡してな。待つちよるけん。

㉗宮崎県支部 連絡先 村中田 博

E-mail : hm110629@gmail.com
皆さんの活躍が楽しみじゃー 300名程の名簿ができちよるよー日本のひなた『宮崎』で待つちよーどー！

㉘鹿児島県支部 連絡先 雲井 未欽

TEL : 099-285-7766
鹿児島では、桜島が毎日噴煙を上げています。その力強い始動は鹿児島島の全ての同窓に届いているはず。支部の和も同じように広がってほしいと願っています。

㉙韓国支部 連絡先 金範洙（キム ヲン）

TEL : 090-6106-0493 E-mail : bskim77jp@yahoo.co.jp
ポストコロナ時代を迎え、韓国文化・韓国語・教育研修を中心に様々な教育活動を予定しています。韓国辟雍のメンバーは教育関係者が中心となっています。韓国地域との国際交流を考える際はぜひご相談ください。

これまでに設立された辟雍会の道県支部では、皆さんからの連絡を待っています。

長きに亘り「諦めないこと」は 納得へのパスワード



東京都立三田高等学校 非常勤教員
(元東京都立両国高等学校副校長)

藤井 英一

■一生懸命だったけれど、悩みも多かった20代、30代の教員時代（前期）

私は、学芸大学を1978（昭和53）年に卒業して以来、47年間の多くの期間を都立高校の地学教員として過ごしました。新卒以来5年間くらいはあっという間に過ぎました。職場では「20代に頑張ることで、きっと30代は楽になるだろう」と思い、地学の授業、担任、部活動（サッカー部、地学部）のどれも精一杯頑張っていました。

一方、学校外では、大学の先輩の松川氏（現東京学芸大学名誉教授）から誘って頂いた地学（地層や化石、理科教育法等）の研究会に参加していました。しかし、そこでは、私は学校のことで精一杯で、会の共同研究プロジェクトの分担も満足に果たせず、全く情けない状態でした。

いざ30代になってみると、「何とか生徒たちに、もっと地学の授業を、分かり易く、面白く、魅力あるものに」と意欲だけはありましたが、しかし、中々上手くいかず、担任や部活にも、また新たな悩みが現れ、これではいつまで経っても悩みから解放されないと感じていました。また、その地学の研究会には、ただ行っているだけ、自分の地学の専門性の浅さに落ち込むばかりでした。さらに、当時、世田谷の風呂なし、帰れば冬は冷え切った暗い6畳一間のアパートの一人暮らしも加わって、その頃は少し鬱状態だったかもしれません。

■悩みを肯定的に捉え、自分の専門性向上に努めた教員時代（中期）

そんな時、ある芸術祭参加のドラマを見ていたら、劇中、会社の相談室のカウンセラーが、若手の悩める中間管理職に「人は苦しいこと、嫌なことがあると自己防衛本能で、無意識的にそのことを忘れよう、逃げようとするものだ。しかし、あなたの今の悩みは、逃げても解決しない。むしろ、悩みを肯定的に捉え、逃げずに本当に解決策を考えたらどうか。逃げていた人生は、振り返った時、何も残っていない。一生懸命取り組んだ人生は、後で振り返ったとき、そこにこそ自分があるのではないか」と語っていました。私は、その時「そうか、悩みを良くないものではなく肯定的に捉え、前向きに過ごせばいいんだ」と気が付き、気分が本当に軽くなりました。

そして、自分のかねてからの課題だった地学分野の専門性向上のため、39歳の時、例の地学の研究会が実施していた研究プロジェクトの「多摩川中流域の地層と貝化石」の研究の成果も使わせて貰い、その一部をもう少し進展させるため、一家で、転住して地方大学の大学院に2年間通いました。再び通った大学院では、適当にやっていた日々学校現場で格闘している同僚に申し訳ない。漸く得られた研究の時間を生かしたいと必死でした。研究では、①ローカルな多摩川の河床にある地層と化石を調べることで、汎世界的な氷河性海水準変動（気候による氷河の発達程度により



地学教室の修論中間発表会



全ての授業で（簡単な）実験・実習を実施



地学選択者と共に、筑波宇宙センター訪問

海水面が上下すること）が分かること（スケールアップ）、②フィールドワーク等で地層を一枚一枚本当に丹念に調べることにより、その地域の過去や自然環境の変遷が徐々に明らかになっていく醍醐味に感動しました。そして、修論の成果を広島で行われた日本地質学会でも発表することができ、ようやく自分の専門性にも少し自信が持てるようになりました。

さらに、私は、ぜひ自分が教える生徒たちにも自分が感じたような「スケールアップ」や「地域の過去や自然環境の変遷を実感できる醍醐味」を味わって貰いたい。何とか地学の真の面白さを伝えたいと、例の地学の研究会で行っていた多摩川周辺の野外実習の授業実践研究、そのためのワークシートづくりや指導法も学びました。50代以降は、管理職として地学の授業に限らず、多くの先生方の様々な授業を見る機会にも恵まれました。しかし、退職まで、やはり授業は難しいもの。奥が深いものとも感じていました。

■科学的概念理解や論理的思考力を伸ばす新しい授業に出会った定年後・非常勤教員時代（後期）

しばらく、研究から遠ざかっていましたが、60歳を過ぎた頃、「例の研究会に再び来てみないか？研究はなかなか一人ではできないよ」という話がありました。久しぶりの研究会で、私は、ICSTシステムという探究型の新しい理科教育の指導法に出会い、これなら、自分の長年の授業経験を生かせるのではないかと思い、このシステムの研究を推進している松川氏に詳細を教えてください、再び授業を創り、仲間の先生に授業実践をお願いしました。この方法での授業後の生徒たちから、例えば「大気の大循環」や「海水の循環システム」が、「全体として把握できた、理解できた」という感想が多数寄せられ、授業評価でも好結果が得られました。そして、これを研究論文として出版することができました。私は、この歳（70）になって、ようやく難しいと思っていた授業創りに納得が得られました。

■諦めないことが新たな道に繋がる。そして学びは一人より皆で。

「よく、長年に亘り一つのことに関わることを諦めないことで、必ず結果が出る」とは聞いていました。今、私は、この歳まで「授業へのこだわり」を止めないで本当によかったと思っています。自分で新しい方法で授業を考えている時、研究会での助言や授業をお願いした仲間とのやり取り、そして実践の見学、それらは本当にわくわくするものでした。また、研修担当として、職場での若手の研究授業等の助言でもこれらの経験はすごく役立ちました。

今思えば39から40歳の時、大学院に行けたのも、研究の成果を野外実習やワークシートにする方法を学べたのも、70歳になってまだ授業に拘ることが出来るのも大学時代の先輩や仲間を含む研究会のお蔭と感謝しています。本当に研究は私一人ではなかなか難しかったと感じています。

私は、この3月で47年間の教員生活に区切りを付けようと考えています。しかし、地学の授業にはもう少し関わり続けたいと考えています。

1978（昭和53）年卒業 D類理科（地学専修）



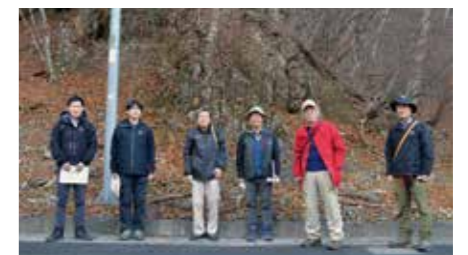
地学部主催「星空への招待」（一般生徒向け天体観望会）各季節に開催していました。



地層の「野外実習」（授業・地学部）平日午後や休日に実施していました。



初任校でのサッカー部



最近の「地学の研究会」2022年秩父巡検（上の写真；右から2人目が松川氏、左から3人目が筆者）

在職中の思い出



元東京学芸大学学務部学務課長

中庭 雅行

高等学校を卒業して、始めて就職したのが東京学芸大学でした。それから42年間、定年退職するまで小金井キャンパスで過ごしたことになります。

大学の仕事といっても就職した最初は本当に何も分からず、ただ先輩や上司の指示に従って仕事をしていたに過ぎませんでしたが、3年くらい経ってやっと仕事の面白さが解り始め、あれこれやっているうちに42年が経ってしまったというような感じです。

自分が関わった業務の中での思い出としては、平成19年（2007）に起きた麻疹感染騒動が一番に思い出されます。年度初めのオリエンテーションを済ませ、授業が始まり出した頃、都内の数大学で麻疹が流行し休

校になったとのニュースが報じられていました。最初は「対岸の火事」のように思っていたのですが、早稲田大学、日大文理学部も次々と休校になり、テレビのワイドショーでも麻疹感染拡大の話題が取り上げられるようになった頃、一本の電話が大学にあり、それは6月実施の教育実習校（高等学校）からの電話でした。内容は、「大学生に麻疹が蔓延しているとかで生徒の保護者から心配の声もあるので実習を取りやめたい」とのことでした。

そうこうするうちに数本、同じような電話がかかってきて、教育実習担当は対応に苦慮していました。

仮に教育実習が出来なくなった場合、教育委員会や



サクラ並木本部棟



勤務した事務所

実習校と再度の日程調整を行う必要があり、大学の授業にも、実習校の授業運営にも多大な影響が有り、また、本学の教育実習生の数を考えたら大変な事態になることが予想され、当時、副学長だった村松先生を中心に今後の対応について緊急会議を開き、出席した保健管理センターの石井所長の助言を受けて、麻疹の抗体検査を全学年に対して実施することと、特に教育実習を行う学生に対してはワクチン接種を奨励し、接種費用の半額補助を決定して5月～7月にかけて実施しました。

感染した学生に関しては、隔離と経過観察を行い学内感染防止に努め、教育実習校に関しては連絡教員を通して大学の現状を丁寧に説明してもらいました。最終的には大学は休校も行わず、教育実習も予定通り実施することができました。

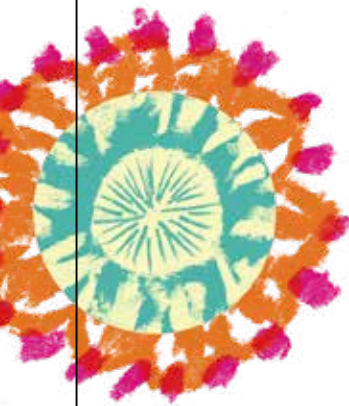
このような緊急事態に関しては、大学教員、事務職員、保健センターなど関わっている人達の連携、情報共有等を密にしてチームワークで乗り越えることが大事であることを実感しました。

その後、新型インフルエンザやコロナウィルスなど

の感染症が次々と起こり、今後も新たな感染症が現れる可能性もあることから、大学は常に感染症対策を考えておく必要がありますね。

教務系の思い出としては、履修登録、成績管理がありますね。私が最初に関わった頃は、すべて手書き、成績表もA/B/Cのゴム印を使って作っていました。時代も平成となった頃に、大学にも電算化の波が押し寄せ、機械化が進みました、平成12年（2000年）にマークシートによる履修登録が始まり、平成18年（2006年）にはオンラインでの履修登録が出来るようになりました。

年度初めに成績表を受け取りに学務課の窓口で学生が大挙して並ぶ光景はなくなり、家にもオンラインで授業も受けられるようになり、大学の風景もドン変わっていきますね。



「出会い」が導いてくれた金メダル



SBC湘南美容クリニック所属

角田 夏実

パリオリンピックが終わり、皆さんの応援のおかげで女子48キログラム級で金メダルをとることができました。きょうは、私が感じた「出会い」の大切さについてお話をさせていただきたいと思います。

■柔道との出会い

私は、9歳の時に柔道を始めました。若いころから柔道をしてきた父に、千葉県の八千代警察署で行われたチビッ子柔道クラブに連れて行ってもらったのがきっかけです。両親によれば、私が体も小さく気持ちも弱々しかったため、柔道を通じて心身を鍛えさせたいという思いがあったそうです。もともと身体を動かすことが好きだった私は、柔道に対して嫌悪感を抱くことなく取り組んだようです。しかし、すぐに強くなるわけもなく、大会では見事に1回戦負けばかり。そんなことが続くと、楽しかった柔道もだんだん嫌になってしまい、中学に入っても、柔道に対するモチベーション維持に苦労する毎日でした。そんななか中学校2年生の時に全国大会に出場しましたが、結果は1回戦で13秒という速さでの負けでした。この時とても悔しくて、初めて「もっと強くなりたい、勝ちたい」という気持ちが溢れたのを鮮明に覚えています。その後、八千代高校に進学し、柔道漬けの日々を過ごします。練習後、一度帰宅した後に真っ暗になった高校のグラウンドでトレーニングをしたこともありました。初めて柔道と真剣に向き合い、強くなりたいと思って練習を積んだ3年間でしたが、成績はインターハイ3位止まりでした。この時、「もうここまでだ。上を目指すのはやめよう」と強く思いました。

■東京学芸大学柔道部との出会い

大学に入学したとき、私は「燃え尽き症候群」と周囲から言われるほど、柔道に対する気持ちは冷めていました。当時の東京学芸大学柔道部は、女子の強化を決めたばかりで、同級生は男子選手ばかり。さらに、上を目指すことをやめた私は、柔道へのモチベーションも保てなく、とりあえず練習に参加するという毎日

を過ごしていました。当初は気楽で良かったものの、もちろん試合では思うように戦えません。そんな時も私を見捨てることなく「今は柔道を楽しみなさい」と声をかけ、辛抱強く見守ってくれたのが前監督の射手矢先生でした。そんな先生の姿もあり、試合で結果がでない自分が嫌になり、悔しさがこみ上げ、気持ちを入れ直しました。射手矢先生は、大学で足りない練習を補うために色々なところに出稽古に連れて行ってくれたり、私が悩んだときには一緒に柔道研究をしてくれたりしました。私は自分が納得しないと前に進めない性格であったため、納得するまでとことん付き合ってもらったのを覚えています。また、柔道部の仲間たちも、私を常に温かく見守り、支えてくれました。技術的なアドバイスだけでなく、精神的なサポートもしてくれる仲間がいたことで、練習の辛さを乗り越えられたんだと思います。私のように弱さや迷いと常に隣り合わせの日々の中でも自分のペースで頑張りたいと



思う人間を、否定することなく受け入れ、時に声をかけ、一緒に成長していくその姿勢は、今の私の生き方にも大きな影響を与えてくれています。

■ブラジリアン柔術との出会い

大学生活での大切な出会いのひとつに、現在、高本道場（東京都小平市）を運営している高本裕和さんがいました。高本さんは私よりかなり年上の学芸大OBで、柔道はもちろんブラジリアン柔術や総合格闘技など、様々な競技に取り組んでいる方です。この方との出会いが、私を「寝技の選手」の道に導いてくれたのです。当時、高本さんは学芸大の道場を借りてブラジリアン柔術の練習会を開いていました。その練習に参加させてもらうようになり、柔道の寝技とは一味も二味も違う寝技の世界を知ることができ、寝技への興味がとても高まりました。「格闘技は大人が行う真剣な遊び」とおっしゃる高本さんの練習は、参加者みんなが平等で、それぞれの目標や目的に合わせて一生懸命取り組んでいました。そこは、互いにアドバイスをしたり技術を共有したりと、豊かな時間であり、「強い・弱い」という力量の範疇を超えて本当に面白いものでした。この練習会に参加する人のほとんどが男性で、私ではまだまだ太刀打ちできないことが多くあり、悔しい思いをすることがたくさんありました。しかし、「面白いから集まる仲間」との寝技の攻防は、部活動とは異なる楽しみの世界でした。そんな中で勝てたときの嬉しさは格別だったのです。頭で考えて動くことが苦手な私は、こういった方々とひたすら乱取りを行い、実戦から身につけることのできる練習が本当に楽しくて、いつまでもしていたいほどでした。それはきっと、「やらされる練習」と「自分で望んでやる練習」の違いであり、子どもの時に外で暗くなるまで走り回っていた時の感覚と同じものであると感じています。そうやって大学での多くの出会いを経て、「燃え尽き症候群」だった私の世界は開かれていき、全日本学生柔道体重別選手権大会での優勝まで辿り着くことができたのだと思います。

■“夢”との出会い

大学生活での素敵な「出会い」を経て、柔道がますます好きになった私に芽生えた“夢”、それが「オリンピック」です。社会人3年目、私が25歳の時に出場した世界選手権（ブダペスト）出場をきっかけに、オリンピック出場という“夢”を抱くようになりました。怪



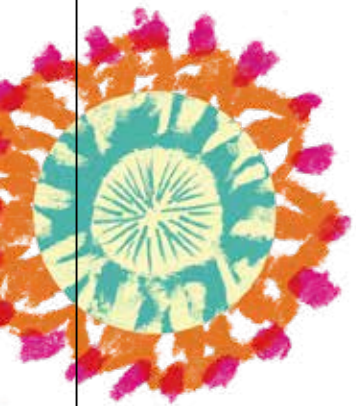
我也重なり、苦しむこともありましたが、この“夢”と出会った私の柔道への思いは、もう消えることはありませんでした。「ここからは自分で道を開いていかなくてはいけない」と思い、練習1回1回、1試合1試合、大会1つ1つ、全てに悔いのないように臨みました。その後、東京オリンピックに向け、階級を変更するなどたくさんの決断をしましたが、何事にも諦めず、後悔を次の糧にできるように前向きに取り組めたからこそ、21年の世界選手権（ブダペスト）で優勝することができ、結果的には今年のパリオリンピックという夢舞台上に立ち、金メダルをとることができたと思っています。

■全ては「出会い」のなかにある

私の人生には、両親、恩師、仲間、他の格闘技と、ここで触れられなかった方も含め、本当に多くの「出会い」がありました。寝技についても、「出会い」が育んでくれたひとつだと思っています。柔道を通じた「出会い」の中で、影響を受けながらも自分の行動に意味を持つことで、人は成長できると感じています。柔道に限らず「こうやったら必ずうまくいく」なんてことはないと思います。面白いことや魅力的なこと、直感など自分の選択も大切にしつつ、身の回りに溢れる多くの「出会い」に飛び込んでいく。これこそが今の私を作り上げたんだと思います。今ある「出会い」を大切にしてください。そして自分の気持ちをしっかりと持ち、パズルを解くように人生を楽しんでほしいと思います。諦めなければきっと何かが変わってくるでしょう。

2015（平成27）年卒業 G類生涯スポーツ専攻

*角田夏美さんはパリオリンピック（2024年7月開催）に出場し、柔道女子（48kg級）で金メダルを獲得しました（日本選手団の金メダル第1号）。また混合団体戦で銀メダルを獲得し、日本の柔道の強さを世界に印象付けました。



障がいは諦める理由にならない



株式会社シロ
西田 杏

今年の夏、わたし自身2度目となる、パリパラリンピックに出場させていただきました。

東京パラリンピックからの3年間、この日のために必死に過ごし、良くも悪くもたくさんの経験をすることができました。結果は求めていたところに届かず努力の全てが報われたわけではありませんでしたが、50mに人生を詰め込み挑戦することができたので、達成感を感じています。

また、東京パラリンピックは残念ながら無観客だったので、わたしにとって初めての有観客の大舞台となり、大歓声の中で泳ぐことができとても幸せでした。

学芸大学を通して、たくさんのご声援ありがとうございました。

■みんなと一緒に泳ぎたい

わたしは小学生の時に体育の授業で水泳に出会いま

した。生まれつき左上腕と右下肢が欠損していますが、小さい頃から体を動かすことが好きだったので、未経験である水泳を始める時も不安は全く無かったことを覚えています。実際に水に入ると、浮力のある水中の方が陸上よりも自由に動くことができる感覚を気に入りのめり込み、気がつけば現在まで水泳の楽しさに魅了されています。

■指導者の視点から水泳を学んだ大学時代

わたしは教員免許を持っていません。学芸大学に通い教員免許を取らないという選択をすることは簡単ではありませんでしたが、3年生の教育実習時に世界選手権が被ってしまったため取得を断念しました。しかし、教育学部で学んだことを生かして水泳コーチの資格を取得し、水泳を選手と異なる視点から学ばせていただきました。



また、E類生涯スポーツ専攻だったため、身体の構造や使い方を詳しく学ぶことができ、専門的な知識が増えたことも大きな財産です。それまでと異なる視点から水泳に向き合うことで新たに気が付ける部分が多くあり、競技力が向上するきっかけにもなりました。

■競技を辞めてからの人生の方が長い

学生の頃は、常に「次がある」という思いが心のどこかにある競技生活でした。就職活動の際に、競技を辞めてからの人生の方が長いと多くの方から言っていただきましたが、その言葉をちゃんと理解できたのは最近だと感じます。もちろん、常に辞めることを考えながら競技を続けていく必要はないと思いますが、自分の中で人生＝水泳になってしまっていた部分もあり、競技の終わりに向き合うことから逃れていました。今は、世界で戦い続けることができる残りの時間を意識し、受け入れて生活しています。引退という言葉

は漠然としたものから明確になり、その分、1つ1つの大切さをより感じられるようになったため、この状況をしっかり楽しみつつ、確実に来るその時まで競技者として誇りを持ってプレーしていきたいです。

■障がいはわたしの特徴

スポーツに限らず何かを行う時に、障がいに対してマイナスなイメージを持たれることがまだあります。例えば、片手だと料理ができないだろうや、片足では自転車こげないだろうなど。この世の中に全てが完璧にこなせる人はいないはずで、障がいの有無に関わらず苦手と感じることは誰にでもあると思います。隣の人と容姿や性格が違うように、障がいも各々の特徴



であり、障がい自体が物事を諦める理由にはならないとわたしは考えております。

また、今でこそ「ユニバーサルデザイン」や「インクルーシブ」などと言ったフレーズを聞く機会が増えましたが、日本国内での障がいに対する意識は海外に比べると遅れていると感じることが多く、社会が生み出している障がい者が今後減っていくことを願います。

2019（平成31）年卒業 E類生涯スポーツコース

*西田杏さんはパリパラリンピック（2024年8月開催）に出場し、競泳混合4×50mメドレーリレー（運動機能障害）で日本チームの7位入賞に貢献しました。

本学名誉教授・河添 房江 「紫式部と王朝文化—大河ドラマ『光る君へ』より—」

2024年11月2日（土）、小雨が降り肌寒く感じる午後、本学と辟雍会共催の第23回東京学芸大学ホームカミングデーの行事が行われ、辟雍会20周年特別企画として講演会が本学S410教室において開催されました。講演は本学名誉教授の河添房江先生による「紫式部と王朝文化—大河ドラマ『光る君へ』より—」、NHK大河ドラマ「光る君へ」よっての関心は高く、学生の参加も多く見られました。講演された河添房江先生による寄稿です。

紫式部と王朝文化

東京学芸大学名誉教授 河添 房江

■はじめに

本学に講師として着任したのが1985年、2019年の定年後も二年間は特任教員として勤務したので、約35年間をこの大学で過ごしたことになります。出身が附属竹早中、附属高校ですので、合わせれば40年以上、学芸大にお世話になったわけです。

さて今年の11月2日、小金井祭の日がホームカミングデーでもあり、その日に辟雍会の20周年特別企画の講演会があるというお話で、会長の馬淵先生から講師を拜命いたしました。一般向きに出来るだけわかりやすい話をとご要望でしたので、大河ドラマの「光る君へ」を材料として、「紫式部と王朝文化」という題で解説する内容にいたしました。

また私の持っている唐物（舶来品）の復元品が、八月にNHKの歴史探偵という番組で紹介されましたので、それらも展示して講演の前後に来聴者に見ていただきました。

講演の内容ですが、最初に大河ドラマのセットを例に、紫式部の時代の文化環境、いわゆる国風文化について解説いたしました。

藤原兼家の邸、東三条殿のセットでは、唐風の唐絵の屏風があり、紫檀の厨子棚、白磁や青磁の壺が並んでいます。いわゆる中国風のしつらえの調度で邸宅が整えられているわけです。それに対して、道長の妻、倫子が育った左大臣源雅信の邸、土御門殿では大和絵の屏風が立てられ、日本風な和的なしつらえになっています。二つの邸の対比で私が思い出すのが紫宸殿の賢聖障子です。賢聖障子の表は中国の賢人が描かれた唐絵ですが、裏は大和絵なのです。つまり国風文化の時代には唐風と和風の



唐物の瑠璃壺（復元品）について説明する河添房江氏

二つの文化が並立していたのです。

国風文化は嵯峨天皇の時代の唐風文化が和様化したものだといわれますが、純日本的な一枚岩の文化だったわけではありません。公的な世界では依然として漢詩・漢字・唐絵が尊ばれ、私の世界では和歌・仮名・大和絵が盛んという重層的な文化でした。大河ドラマのセットの東三条殿と土御門殿の差異には、まさに国風文化のエッセンスが見事に集約されているわけです。そして男性貴族はその両方の文化に通じているのが理想でしたが、女性でも紫式部や清少納言は男性並みの文化水準を持っていたので、『源氏物語』や『枕草子』といった傑作を産み出すことができたわけです。

また国風文化の時代は、唐物と呼ばれる舶来品を消費する、洗練された都市文化でもありました。唐物とは中国からの舶来品、もしくは中国を経由した舶来品で、さまざまな対象があります。香料・ガラス・紙・陶器・布・書籍・珍獣などです。平安貴族にとって唐物は稀少品・贅沢品であり、その権威・権力・富を象徴するステータスシンボルでした。

■秘色青磁について

大河ドラマの中で唐物のわかりやすい例として、最初に青磁を取り上げました。東三条殿のセットには青磁の壺が三つほど、それに水注が飾ってあります。道隆が飲水病（糖尿病）になり、「水、水…」と水を欲しがって飲んでいた時にも使われたものです。紫式部と為時が松原客館に宋人を訪ねた際に出てきた食器も青磁でした。

青磁は日本ではまだ焼くことができず、当時は中国の越州窯で焼かれた秘色（ひそく）青磁と呼ばれるものが輸入されていました。「秘色」は唐代の漢詩文にしばしば登場し、神秘的な色、あるいは特別な玉の色、翡翠のような色という意味でした。越州は上海の少し南、現在

の浙江省にあります。越州窯では唐代の終わりから青磁が作られて、呉越国の時代には明州の港から輸出され、博多の鴻臚館経由で京にもたらされた人気商品でした。また西方にも運ばれ、遺品がエジプトのほうにまで残っています。まさに秘色青磁は世界のブランド陶器だったわけです。

交易には大宰府の役人が関わりますが、出先機関の博多の鴻臚館で来日した商人たちと会うので、現在の鴻臚館跡展示館でも青磁の遺品がたくさん展示されています。特に有名なのが青磁花文椀で、粉々になったものをくっつけて見事に復元し、美しい蓮の花びらを浮かび上がらせています。まさに秘色青磁の逸品と言えましょう。

青磁は博多から都に運ばれ、京都市考古資料館でも発掘された青磁が展示されています。また京都国立博物館には重要文化財である浄妙寺出土の青磁水注があります。浄妙寺は道長と頼通のゆかりの寺で、道長一族の繁栄を象徴する秘色青磁の水注です。

文学作品にも青磁は現れます。『枕草子』の「清涼殿の丑寅の隅の」の段では、大きな秘色青磁の瓶に桜の木をたくさん挿して、とあります。これぞ中関白家の栄華の象徴です。また、『源氏物語』の末摘花巻では、不美人の宮家のお姫様・末摘花が食器として青磁を使っています。光源氏が久しぶりに訪れて様子をうかがうと、女房たちがおさぎりの粗末な内容の食事をぼそぼそと食べていますが、食器だけは秘色青磁で素晴らしいという場面があります。



浄妙寺出土 青磁水注

■唐猫について

大河ドラマでは倫子が飼っている猫、小麻呂も人気が出て評判になりました。猫も実は唐物の一つといえます。当時、中国から書籍を船に乗せる時に鼠よけで猫も一緒に乗せて来ました。舶来の珍獣には孔雀や鸚鵡もいますが、一代限りで繁殖できないのとは違って、唐猫は室内で飼うため繁殖できます。当時、上流貴族が飼っていたペットの猫は舶来の猫か、その子孫というわけです。

宇多天皇の日記には、飼い猫の唐猫についての記述があり、最も古い記録といえます。宇多天皇は「他の猫は浅黒い色をしているけれど、この猫だけは墨のように真っ黒で、精悍でよく鼠をとっていた」と、飼っていた唐猫について記しています。ちなみに倫子の父、源雅信は宇多天皇の孫ですから、倫子は曾孫に当たります。

『枕草子』にも唐猫が出てきます。猫は背中だけ黒くお腹は白いのが良いとか、赤い首綱に長い紐をつけて引きずって歩き回る様子も可愛いと書かれています。また一条天皇がとても猫好きで、自身の猫に「命婦のおとど」という名前をつけて五位の位まで与えて可愛がっていたという逸話も出てきます。



光吉色紙帖 若菜上 蹴鞠

『源氏物語』では女三の宮が唐猫を飼っていた話がある。頭中将の息子の柏木と光源氏の息子の夕霧が六条院で蹴鞠をしていた時に、女三の宮の唐猫が大きな猫に追いかけて御簾から飛び出します。そこで御簾が捲かれて、女三の宮の姿が柏木に見られてしまうのです。柏木は女三の宮にもともと憧れていたもので、ますます恋心を募らせます。女三の宮が光源氏の正妻で会えない以上、この唐猫を身代わりに欲しいと願って、苦勞して自分の飼い猫にします。そして朝昼晩と自分の懐に入れて、まさに猫可愛がりするわけです。

■終りに

講演では大河ドラマの父為時の書斎のセットから、漢籍の重要性についても解説しました。また監修をお手伝いした「歴史探偵 光る君へコラボスペシャル2」での唐の紙による豪華本「源氏物語」、ドラマで一条天皇に献上された『枕草子』が唐の紙の表紙であったことから、唐の紙と『源氏物語』との関わりなどもお話ししましたが、詳細は省略させていただきます。興味がある方は、拙著『紫式部と王朝文化のモノを読み解く』（角川ソフィア文庫、2023）をお読みいただければ幸いです。

講演の最後では、最初の話に戻って、唐物を消費して王朝文化を創り上げていた平安中期を、なぜ鎖国のような国風文化の時代と呼んできたのか、その歴史的経緯についても解説しました。この点については、「894年の遣唐使廃止から唐の文物の影響もうすれて、国風文化に推移した」という言説が、すでに明治期の国文や国史の教科書に出ていることに注目しています。中国文化から自立した日本文化、日本文学であるというのは、まさに明治の国民国家に都合の良い言説であり、それゆえ定着したといえます。このように唐物に注目すると王朝文化、王朝文学が別の角度から照らし返されて、新しい見方ができることを繰り返して、この稿を閉じたいと思います。



河添先生講演会風景（布施絢子さん撮影）

ご挨拶

東京学芸大学長 國分 充



辟雍会 20 周年、まことにおめでとうございます。毎年、辟雍会には、11 月のホームカミング・デーで、意匠を凝らした企画をお考えいただいております。まことにありがとうございます。

また、昨年の本学創基 150 周年の折には、多額のご寄附をたまわりました。それを原資といたしまして、学生の就職にかんする資料を整え、図書館に、辟雍会からのご寄附によることを明記して、学生の利用に供しております。これもまた、大変にありがとうございました。

本学卒業生は、教育界をはじめとして、様々な分野で活躍しているところでありますが、最近の本学の卒業生の活躍に関する話題としては、何と言っても、パリ・オリンピックで、角田夏実さんが、女子柔道 48kg 級で金メダル、団体戦で銀メダルを獲ったということがあげられましょう。彼女は、すでに世界選手権 3 連覇をなし遂げており、本学卒業生二人目となる栄誉賞を授与していたところでしたが（一人目は、栗山英樹 WBC 監督）、今回栄誉教授を授与いたしました。また、同じくパリのパラリンピックでは、西田杏さんが、水泳リレー種目で 7 位の入賞を果たしました。二人ともさらなる活躍が期待されるところです。

さて、大学で、今、取り組んでいる大きな事業をあげますと、「教員養成フラグシップ大学」があります。これは、全国で 4 つの大学が選ばれ、文部科学大臣より指定を受けて行っているものです。本学では、この事業を推進するため、「先端教育人材育成推進機構」を立ち上げました。この機構では、現代的な教育課題や教員養成の問題、現職研修にかかるプログラムを開発するとともに、事業展開のため、他の教員養成系大学・学部と協定を結び、さらに、東京より北のほとんどの都県の教育委員会と連携協定を結んで、開発プログラムの普及を図っております。本学の創設以来の使命である“有為の教育者養成”を、本学の伝統を踏まえて、本腰を入れて、取り組んでおります。

ところで、辟雍会がつくられた 20 年前、ほぼ時を同じくして国立大学に起こったことに法人化があります（2003 年）。この成否は、まだ、これからの評価に待つところもありますが、財政的には、うまくいっていないと言わなければならない状況となっております。諸物価が高騰しようと、人事院勧告がどう出ようと、運営費交付金は中期計画中期目標期間中は不変のまま。自己収入を増やせと言いつつ、国立大学としての縛りはまだまだ存在したまま等々。国立大学協会が、今年 7 月に「もう限界です」という声明を出す状況となっております。本学も給与面に手を入れざるを得なくなっています。会設立の記念すべき 20 周年に、こうした話題を持ち出すことは、まことに心苦しく存じますが、いつにも加えてのご寄附など賜れば幸いです。本学 HP のトップ場面一番上の「学芸大学への寄附」のボタンから入って頂ければ、わかるようになっております。

そうした法人化を経ての国立大学は、同窓会をはじめとする、大学を取り巻く支援組織との関係を密にしていけることが必要となっております。これまでの本学に対する数々のご支援に改めて感謝申し上げますとともに、引き続きのご支援、ご協力、何卒よろしくお願い申し上げます。



辟雍会創立 20 周年を祝して

元東京学芸大学長 岡本 靖正



辟雍会が発足して 20 周年を迎えられたことは、まことにおめでたく嬉しいことです。初代の会長、荒尾禎秀先生に始まり、長谷川貞夫先生、鷺山恭彦先生、馬淵貞利先生、長谷川正先生、そして再び馬淵貞利先生と続く歴代の会長さんを中心に、理事、役員、そして会員の皆さまが努力され、支部も充実し、各地での活動が続けられてきたことは、機関誌「Hekiyou」や「辟雍会通信」で拝見しておりました。会員の 1 人として、皆さまのご努力に深く感謝申し上げます。

私は、2003（平成 15）年 11 月 10 日に任期満了で退任いたしました。任期中に何としても東京学芸大学の全国同窓会を立ち上げたいと思っておりました。それまで既に東京都の教員になられた卒業生の方々を中心に組織されて、さまざま活動を展開され、大学もいろいろのかたちで助けていただいていた一般社団法人東京学芸大学同窓会が存在していましたが、新制大学として発足した東京学芸大学が創立 50 周年を迎える頃までには、卒業生の皆さんも全国各地で教員になられ、あるいは教職以外の仕事に就いておられて、全国規模の卒業生全体の同窓会組織が望まれておりました。

加えて、昭和 48（1973）年以降、わが国の出生率が下降し始め、昭和 50 年代半ばにはそれが幼稚園・小学校の入園・入学者数に現れてきて、教員採用数が一挙に減少しました。ただ、18 歳人口はまだ上昇中で、単純に国立大学の入学定員を削減するわけにはゆきませんでした。昭和 61（1986）年 2 月に文部省は「国立の教員養成大学・学部の今後の整備に関する調査会議」を立ち上げて、半年後に報告書が出され、教員養成学部の入学定員の一部を他学部へ振り替える、あるいは教員養成学部の中に教員以外の職業分野へ進出することも想定した課程を設置する等の方向を示しました。それを承けて、東京学芸大学は、昭和 63（1988）年 4 月に、教養系課程として「芸術課程」、「情報環境科学課程」、「国際文化教育課程」、「人間科学課程」の 4 つの課程を新設したのでした。それに伴っ

て教養系の学部主事が置かれ、初代の学部主事は島貫陸先生でしたが、平成 2 年度（1990 年 4 月）から、2 期 4 年、たまたま私が学部主事を拝命し、その間に教養系課程の卒業生を送り出すことになりました。そこでまた、あらためて全国的な同窓会の組織化が強く要望されました。

もう一つ、この間、昭和 41（1966）年に、教育系大学・学部として初めて東京学芸大学に大学院修士課程が設置され、それから 30 年を要して、平成 8（1996）年ようやく全国 48 のすべての国立教育系大学・学部において、修士課程の整備が完了し、併せて同年、東京学芸大学と兵庫教育大学を基幹大学とする連合大学院博士課程が設置されました。

皆さまご存知のとおりのことですが、以上のような経緯を背景に、近づきつつあった創立 50 周年の記念事業計画が、蓮見音彦学長の下で進行する中で、卒業生名簿を作成する計画が、当時学生部長であった小林志郎先生、それを継がれた荒尾禎秀先生、そして実務的には長谷川貞夫先生たちを中心に進められ、1996（平成 8）年に 1,200 ページに近い『卒業生名簿 1996 東京学芸大学』が刊行されました。その後は、個人情報保護に関わって、作成ができなくなった大冊の卒業生名簿でした。

東京学芸大学全国同窓会としての「辟雍会」が発足するまでには、さらに 7 年を要し、発足の会が開かれたのは、私の任期満了の 1 週間前でした。関係された大勢の皆さまが、せめて私の任期中にと骨を折って下さったお蔭でした。会の命名者は、中国文学の佐藤正光先生でした。蓮見音彦先生、長谷川貞夫先生、佐藤正光先生は鬼籍に入ってしまったかもしれませんが、この席におられれば、どんなにお喜びになったことかと思えます。

以上、二昔前のことを感慨深く思い返しながら、私自身は、皆さまとともにこの席に臨んでいることを、文字通り有難きことと感謝し、20 周年をお祝いする次第です。有難うございました。



初代辟雍会会長
荒尾 禎秀

問わず語り — 辟雍会設立のころ —



辟雍会創立から20年を越えたこと、まずはめでたいです。設立の頃の昔話をするにしても日記などは処分してしまったので、手がかりも記憶もおぼろです、誤るところあればご容赦を。

1999（平成11）年が本学の創立50周年だということで、50年史編纂などの記念事業に加えて、全国規模の同窓会が構想されていました。これは折からの大学、とりわけ教員養成系大学を取り巻く厳しい環境の変化と、それとの関係で教育学部に設置された教養系の卒業生の輩出、教員就職率の低下などが関係していたと思います。

このようなとき、本学が発展する一つの方策として卒業生の力を大学のために結集することが考えられました。卒業して教職に就いた者は全国各地におり、教養系卒業者のみならず、教職外の仕事で活躍する卒業生もまた全国に多数います。しかし卒業生の力を総結集すると言ってもその仕組みがそもそも無いといってよい状況でした。言うまでもなく、東京都で教職に就いている卒業生には伝統ある組織「社団法人・東京学芸大学同窓会」がありました。しかし全ての卒業生を対象とする仕組みという事になると、新たな取り組みが必須でした。巣立っていく学生のためにも、大学のためにもどうしても全卒業生の力を結集したい、この強い思いが50周年の事業として全国規模の同窓会設立構想に込められていたものと思います。

これらの事業に私が関わったのは1996年4月からです。それまでの準備進行は蓮見音彦学長のもとで学生部長をされていた小林志郎さんを中心に進められていたのだと思います。その後任を私が拝命したので、計画を受け継ぐことになりました。小林さん発案の『東京学芸大学卒業生名簿1996年版』は、のちに辟雍会2代目会長となる長谷川貞夫さん（当時就職委員会委員長）を代表者とする「世話人会」が中心となり、「社団法人・東京学芸大学同窓会」（当時は高橋壯之理事長）の

協力を得て、その年の秋に刊行されました。私も1965年に乙類国語科に入学したので、この名簿に名があります。小林志郎さんはこの名簿をもとに全国同窓会を作る算段があったのかもしれませんが、新制大学として発足以降これまでの全卒業生の名前のある名簿の作成公刊は、個人情報保護の観点からこれが最初にして最後となるでしょう。

翌1997年に蓮見音彦学長から岡本靖正学長に交代しました。更にその翌年には法改正による学生部長制廃止と副学長（2名）新設という組織替えが行われました。副学長職は小林志郎さんと私が拝命したのですが、私の担当分野は引き続き教務学生関係であったので全国同窓会作りの担当を続行することになりました。

これに関連して思い出すことがあります。学生部長は入学式の後に新生を前にして本学での大学生活関係の話をするのが慣例になっていましたが、それをやめました。代わりに新生限定サプライズとして、それにふさわしい方を迎えて話をしてもらうことにしました。これは50周年事業の準備を進める中で、同窓意識を持ってもらうにはどうしたらよいかを考える過程で生まれました。新生限定のプレゼントが、その年度の学生だけが持つ共通の話題、思い出としていわば「年度のマーカー」となり、学年としての同窓意識、同じ学び舎で学んだ同期生としての特別感につながるのではないかと考えたのでした。卒業生で映画監督の金子修介氏、冬季長野パラリンピック、オリンピックでの金メダリストの松江美季氏（本学保体科）と原田雅彦氏、国立天文台長だった小平桂一氏などに話をしてもらいました。

50周年記念事業について小林さんと意見交換をいろいろしたと思うのですが、既にことは走り出していたためか、余り記憶がありません。ただ、ホームカミングデーの構想は小林さんによるもののように記憶しています。「毎年同じ日に卒業生

が母校に帰ってくる」という催しとそのネーミングには、新鮮でとても心温まる印象を持ちました。全国規模の同窓会構想の実現のためにホームカミングデーは重要な行事だと位置付けられて、その後も大学と辟雍会の共催事業として続けられているのは周知のところでした。

3年後の50周年記念事業を行う準備として、いくつかのことをしましたが、その一つとして大学旗を作りました。金糸の刺繍での文字字体を「東京学芸大学」とするか「東京学藝大學」とするか迷った記憶があります。印象としての恰好や「芸」の原義などから後者を良しとする方々も少なからずいるわけですが、新制大学創立50年の記念としては戦後の「漢字表」にある字体を採るべきかと考えて前者にしたように記憶しています。

記念行事の準備会での議論の中で、全国同窓会組織と車の両輪のような関係にあって是非とも必要な組織として出版会も作ろうという話が出てきました。その実現に向けての議論やその先行実践に力あった人の一人は数学科の教員であった池田義人さんだったと記憶しています。池田さんの柔軟にして卓越した発想や考え方と穏やかで懐広い人柄は、関わっていた人々の思考を整理し道を示してくれて、心を掴みました。新生歓迎のサプライズを山田洋二監督に依頼したことがあるのですが、これも彼の卓越した人脈のお蔭だったと記憶しています。出版会は2001年に設立されますが、池田さんは初代の出版会事務局長に就きます。とはいえ彼は全国同窓会設立にとっても欠くことのできないキーマンでした。後に辟雍会の初代幹事長として活躍します。

出版会ができる2年前の1999年11月3日に初のホームカミングデーが開催されました。『東京学芸大学五十年史』の刊行などとともに実施された大学の50周年記念事業の一環でした。

その後毎年11月3日にホームカミングデーが行われる中、全国同窓会設立の準備も進んでいくわけですが、実はこの辺りは記憶に余りありません。下準備をあれこれしていたのだと思いますが、副学長の仕事が忙しかったこともあったのでしょう。池田義人さんを中心に、発足時に副会長となる東原昌郎さんや5代目の会長となる長谷川正さ

んなど賛同する少なからぬ方々と議論を重ねていました。

大きな問題は、組織の問題としては会員の範囲、会費の額と徴収方法、運営組織の構成など。活動の問題としては、誰に対してどのような事業を行うのか、どのように組織を拡大充実していくのか、会員名簿の管理方法など。これを要すれば、会則の制定です。

我々の目指した全国同窓会は、大学を核に卒業・修了生、在校生、教員・職員がスクラムを組み、大学を応援し、学生を支援し、またその構成員が交流し親睦を深め、教育及び文化の創造、振興、発展に力を尽くす「オール学芸」の組織です。同じ学び舎で時間を共有した「同窓」の「会」です。構成員の範囲をこのようにすることについては、さほど異論はなかったように思います。

会費の徴収に関しては多様な意見がありました。年会費とすると個人々への徴収は次第に難しくなる、年会費は徴収事務が煩雑になるなどの意見がある一方、一括納入の終身会費の場合は将来的な保証ができるか、右も左もわからない入学時の一括徴収は任意とはいえ如何なものかなどの意見があり、取りまとめは相当に苦悩しました。

組織・運営についてはこれも池田さんが原案を作ったように思います。こだわったのは「總會」を設定しておいて、規程としてはその代わりに「全国代表者会議」が果たせるようにした点でしょう。出来るだけ直接民主制に近いことをイメージしていました。「代表者」の概念もできるだけ多様な集団の代表という事だったと思います。

できあがる全国同窓会のイメージは、卒業生は教職関係者が多くかつ都道府県を蔽っているもので、まずは都道府県ごとに全職域の卒業生を包括する支部組織を作る。一方職種別にも都道府県で全国的な横の連携を取ってこれも組織化する。学生組織は学科なりサークルなどで組織を作る、といったように考えてみました。そして、とりあえずは出来た集団からまず結集する。私のイメージはそのようなものでした。

議論が多様に行われる中で、後に機関誌『辟雍』の編集長を務める遠藤満雄さんとの出会いは、かなり衝撃的でした。ホームカミングデーでの話を

踏まえてだったでしょうか、岡本学長が全国同窓会の必要性を説いたのに賛同し、その本気度を信じて、自分にできることがあれば参加したい、とりわけ教職以外の卒業生にも光をあてその組織づくりを考えたい、といったことを強い意志を滲ませて語ったのでした。遠藤さんは新聞記者をしていたので、その職歴は辟雍会にとって大きな力となりました。また、青森県の同窓会をまとめていた種市哲さん（初代副会長）も、全国同窓会への期待を方言でとつとつと語ってくれました。清水建設にいた山本一雄さんもまた教職外の卒業生の結集を強く願い、辟雍会発足時は理事を務めてくれました。その後現在（副会長）に至るまで献身的に会の運営に携わってくれることとなります。会の歴史を内側から一番よく見続けてきた人の一人です。事務職員の協力支援も極めて大きいもので、側面から何かと助けてもらいました。色々な方がそれぞれの立場から積極的に意見を出してくれたのは大変にありがたいことでした。

最も難題であった事案は、この組織作りに関して「社団法人・東京学芸大学同窓会」との関係作りでした。全国的な同窓会の必要性では一致するものの、「社団法人・東京学芸大学同窓会」の位置付け、また期待される全国同窓会建設への道筋などについて、丁寧な話し合いが必要でした。

時間は過ぎるなか、少しずつ一致点が見出せるようになり、「社団法人・東京学芸大学同窓会」の佐藤倫司理事長のとき、この問題についての正式な協議の場を設けることになりました。佐藤倫司さん及びその前後数代の理事長、そして当時の役員の方々の英断に今も感謝をしています。これは大変にありがたいことでした。

この問題点は次のように整理されるかと思えます。「社団法人・東京学芸大学同窓会」は法人として認可された定款に従わざるを得ず、それに依れば東京都の教員が会員であること。定款を改めることはしがたく、また歴史が長く、大学との関係も深く、組織内での親睦、研修、管理職養成などの実績を持っているので当然解散もしがたいこと。従って「社団法人・東京学芸大学同窓会」の存続を前提に全国同窓会を模索

する以外はないこと。

このような状況であればとりあえずの解決方法は、全国同窓会の役員に「社団法人・東京学芸大学同窓会」を代表する役員の方にも加わっていたら、後は走り出してから考える、という事かと思うに至りました。当初は、単純に言えば全国同窓会の一支部として「社団法人・東京学芸大学同窓会」を位置付ければいように私には思えたのですが、そう簡単ではなかったのです。

組織問題だけではなく、そもそも同窓会というものは何をするのか、その事業の在り方、その実現に向けての組織の作り方なども議論しました。実績の違いと、会員の範囲の違いがしばしば議論を白熱させました。これらの議論は当時「社団法人・東京学芸大学同窓会」の副理事長をしていた吉野尚也さんとするが多かったと記憶していますが、いつも圧倒されていました。しかし、辟雍会発足時には辟雍会副会長として私を導いてくれました。同会の加藤正克さん、菅野政徳さんも理事に加わって力を貸してくれました。

こうして、いささかいびつさがあるものの、全国同窓会は発足に向かって急速に準備が進みます。

「いびつ」というのは、たとえば現在の大学のホームページを見ると下の方に「辟雍会・同窓会・卒業生」という表示があります。そこを開くと「辟雍会／東京学芸大学辟雍会」と「[社]東京学芸大学同窓会／都の教員の同窓会」と二つのコンテンツが並んでいる。これがどういう関係なのか、なぜ二つあるのかは、事情を知る者でないと理解しがたいと思う。こういう姿をいま「いびつ」と表現してみました。

思い出を、辟雍会設立時に戻すと、会の名称の問題がありました。全国同窓会設立の協議会の公募に応じた中国文学の教員佐藤正光さんの「辟雍会」が採択されました。「辟雍」の二字とも常用漢字表になく、意味もすぐには分からない点が問題になったように思いますが、諸橋轍次『大漢和辞典』（大修館）に「周代の天子の大学の名。辟は明、雍は和。明達諧和の義。」とある説明を受けて、素晴らしいネーミングだと嬉しくなったも

のです。初代幹事長の池田義人さんは「大学と不即不離の関係にある全国同窓会の名前を『辟雍』と提案されたのは慧眼と言わざるを得ない。」（『辟雍』第1号「『辟雍』に託された夢の実現を目指して」と大賛成でした。難字ですが確かに崇高な思想性があり、字画の見た目もどっしりしていて、大変にいい命名だったと思います。

その後辟雍会のロゴマークも決められましたが、この方は美術科の教員の正木賢一さんのデザインだったと思います。

事務所の問題もありました。一から作るというのは本当に大変だと実感したものです。これまでの会合は20周年記念会館（のちに「20周年記念飯島会館」）を当然のように使っていたのですが、考えてみればこの建物は大学のもの。辟雍会は大学の外部団体ですからそこははじめが求められました。その頃この建物の2階の小部屋は大学公認の出版会が倉庫として使っていたと記憶しますが、そこを何とか無賃で使わせてもらえるよう大学をお願いをしました。電話も、電気代もとお願いをし、まさにおんぶにだっこです。

2003年11月3日。ホームカミングデーに合わせて設立総会が開かれました。私が全国同窓会設立を手掛けてから、7年半かかった事業でした。多くの方々が一緒になってついに創り出したものでした。

このときは本当に重荷を下したようで、うれしいというよりホッとした感を抱きました。その後の国分寺での懇親会で、やっとうれしい思いが湧き達成感も感じました、岡本学長の仕事の一端に関わることが出来たという思いもありました。

実はここから辟雍会のスタートで、全てを軌道に乗せて動かさなければならぬのですから大変でした。辟雍会発足後に岡本学長が鷲山恭彦学長と交代され私もやがて副学長の任を解かれたので、身軽になりましたが、課題は山積です。そのなかで、比較的楽しい、あるいはうれしい出来事

が思い出としていくつか残っています。

一番の思い出といえば、学生歌「若草もゆる」の作詞者、作曲者、伴奏編曲者の実像にたどり着いたことです。2007年の第9回のホームカミングデーに大学と共催で三人をお迎えして話を伺うことになりました。その露払いに機関誌『辟雍』の編集長であった遠藤満雄さんが、持ち前の新聞記者魂で現地に飛びインタビューを試みて記事に残してくれました。この一件はうれしい出来事でした。

多くの思い出の中で、とても辛い思い出。それは辟雍会の発足に大いに力を発揮され、初代幹事長として私の右腕となってくれていた池田義人さんが2006年3月に急逝されたことです。「将星落つ」というべき大事でした。かけがえのない人を失いました。辟雍会発足2年半でのことです。彼が存命であれば今辟雍会はどの様であったかとも思います。

辟雍会は多くの方々の力の結集により出来ました。こうして昔を思い出してもそのことに思いが至り、感謝を申し上げるばかりです。心残り、教職以外の職に就いている卒業生の支部なりを、少しでも形に出来たらよかったのということ。

既に20年、辟雍会は大きく逞しく育っています。機関誌『辟雍』は毎月ワクワクする、素晴らしく美しい表紙と内容です。その『辟雍』を紐解くと辟雍会の足跡がよくわかります。時折それを見ながら、昔を思うとともに、辟雍会の歩みが永く続き、更なる発展をするように祈念しております。

東京学芸大学と辟雍会の共催事業 「先輩と一緒に学校を訪問しよう！」

コロナ禍に中断し、昨年復活した学生の学校訪問事業は、今年度で5回目となります。9月から10月にかけて5つの学校で実施されました。いずれも特色ある学校で、参加した大学生および大学院生は新鮮な印象をもちました。引率・指導には大学の先生の協力を得ました。またボツワナ共和国の学校については本学附属国際中等教育学校の生徒の参加や先生方の協力もありました。なお、学校訪問の様子については辟雍会のホームページに掲載されています。

以下は、当日参加した学生からの感想です。

① 成城学園初等学校

(東京都世田谷区)

[日時] 令和6年9月20日(金)

[参加人数] 12人

② 富士見市立つるせ台小学校

(埼玉県富士見市)

[日時] 令和6年9月26日(木)

[参加人数] 5人

③ 文化学園大学杉並中学・高等学校

(東京都杉並区)

[日時] 令和6年10月1日(火)

[参加人数] 8人

④ 国際基督教大学高等学校

(東京都小金井市)

[日時] 令和6年10月8日(火)

[参加人数] 13人

⑤ ナノーガンコミュニティ中学校

(ボツワナ共和国) *オンライン

[日時] 令和6年10月9日(水)

[参加人数] 多数

辟雍会の引率責任者は白木信子(②)、小澤一郎(①③④)、荒川悦雄(⑤)

① 成城学園初等学校

体験から学び、つながりも密接

初等教育教員養成 学校教育選修 3年 橋本花



成城学園初等学校は私立ということもあり、この学校ならではの特色を様々な場面で見つけることができ、非常に学びの多い時間となりました。見学時は東京学芸大学出身の先輩である高橋丈夫校長先生が常に付き添ってくださり、学校の案内をして下さったり、質問に答えて下さったりしたため、学校のことを大変よく知ることができました。

訪問を終えて、特に印象に残ったことを紹介いたします。まず一つ目は、子どもたちが自ら体験して学ぶことができるように整えられている施設がたくさんあるということです。その中でも特に印象に残ったのは、「かんさつの森」という場所です。この学校は、東京都世田谷区という都会にあるにも関わらず、子どもたちが自然に親しめる「かんさつの森」という場所があります。そこは小さな森のようになっていて、子どもたちが虫を探したり、植物を観察したりして自然に親しむことができるようになっていました。このような場所が学校にあると、子どもたちは自分の体験から学びを得ることができます。他にも「数学のへや」、「国語のへや」など各教科の部屋もあり、子どもたちが体験を通して学ぶことができる施設が整えられていました。これはこの学校の大きな魅力だと感じました。次に二つ目は、人と人との関わりが密接であるということです。この学校では、子どもたちは教師のことをあだなで呼びます。子どもたちと教師の関わりが密接であるだけでなく、子どもたちの保護者と教師の関わりも密接です。保護者は学校に自由に入出入りすることができ、いつでも授業を見ることが出来ます。実際に学校見学時も保護者が多くいらっしやっていて、子どもや教師と笑顔で話をしていました。子どもたち同士の関わりも密接です。この学校は学年ごとに教室のフロアが分かれているのではなく、1フロアに各学年が1クラスずつある校舎になっています。そのため、子どもたちの異学年交流が盛んにおこなわれており、子どもたち同士のつながりも密接になっています。

相手の名前を呼んでから挨拶や感謝をするあたかい校長のもと、とても素敵な学校生活が営まれており、その一日を見学することができて大変良い経験となりました。今後の研究や教育活動に生かしていきたいと思えます。

② 埼玉県富士見市立つるせ台小学校

埼玉県富士見市立つるせ台小学校への訪問

初等教育 英語コース 2年 マリノ・リューカ



今回は埼玉県富士見市立つるせ台小学校に訪問をし、貴重な体験をさせていただきました。この学校は、外見だけ見てもすぐに分かるほど特殊な学校であります。駅から向かって学校が視野に入ったら、グラウンドが人工芝になっていることに気づきました。校長先生曰く、芝生は管理が難しいが、普通のグラウンドにはないようなメリットもたくさんあるそうです。例として、子どもたちが転んでも土のグラウンドほど怪我をしないことと、土ほど熱くならないことが挙げられました。校舎内に入って注目したのは、学校のあらゆる所に設置してある掲示板でした。最近の行事や行う予定のイベント情報はもちろん、過去に行われた行事の写真などが子どもたちの感想と共に貼ってあり、児童生徒のモチベーションにつながると感じました。行事の写真だけでなく、階段にある掲示板には英語のフレーズや、理科などで使える公式が貼ってあり、児童生徒たちが教室に向かっていく途中で無意識のうちにその情報を吸収できるシステムもありました。

立つるせ台小学校の一番大きな特徴は教室の構造自体です。誰もが驚くことに、教室の廊下側の壁があり

ません。教室と教室の間にももちろん壁はありますが、それらの教室はすべて廊下の広い共有スペースでつながっています。壁がないと聞き、音が他の教室に漏れて子どもたちの集中力に悪影響があるのではないかと考えたが、いざ教室の中に入ったら、防音がしっかりしておりその不安もなくなりました。

校長先生と東京学芸大学卒業生の坂本先生にお話を伺ったところ、働き方改革の制度を守ってワークライフバランスの良い職場だと感じました。地域との連携もできており、訪問の日に地域のコーチがサッカー教室を開いていました。

全体的な感想として、私立の学校に全く見劣りしない「未来の学校」という言葉にピッタリ合う学校だと感じました。この学校に来る児童生徒も教員の方々も楽しく生活できる環境だと感じ、学校教員になる意志が更に高まりました。

③ 文化学園大学杉並中学・高等学校

百聞は一見にしかず

初等教育専攻 ものづくり技術コース 1年 新井 沙希



2024年10月1日に、東京学芸大学辟雍会主催の学校訪問事業にて、文化学園杉並中学・高等学校を訪問させていただきました。文化学園杉並中学・高等学校は21世紀型のグローバル教育を推進しており、「日本」と「カナダ」2つの国の卒業資格を取得できるDD（ダブルディプロマ）コースを設置している、とてもユニークな学校でした。学校訪問に行く前は「2つの国のカリキュラムを学ぶ学校」についてのイメージが湧かなかったのですが、実際に訪問してみて、文化学園杉並中学・高等学校は日本の教育とカナダの教育の良い部分を独自に組み合わせており、生徒の未来の選択肢が広がるような教育を行っていると感じました。当日は英語で行われている化学の授業などを見学させていただきました。グローバル教育の最前線ではどのように授業が行われているのかを間近で見ることができ、とても興味深く、貴重な時間でした。

一番印象的だったのは、とてもいきいきとした先生方の姿です。学校の概要についてお話を聞いた際、先生方が常に前を向き、新しいことを取り入れ、教育の最善策を追求し続ける姿勢と、教育への熱意を感じました。10年前にカナダブリティッシュコロンビア州の海外校として認可が下りた後もなお、チーム一丸となり、学校全体で21世紀型のグローバル教育にチャレンジしているのだと感じました。「次の目標は、校内の公用語を英語にすることだ」と、さらなるグローバル教育の実現に向けて走り続ける先生方のいきいきとした姿を見て、教師に対するイメージが変わりました。まさに、百聞は一見にしかず。昨今の教師という職業に関するネガティブなニュースにより、教師という職業のマイナスな面を意識することが多かったのですが、「教師って素敵な仕事だな。面白そうだな。」と改めて感じる機会となりました。自分の進路を考えるうえで、とても為になる、貴重な経験をさせていただきました。本当に参加して良かったです。学校訪問事業を企画してくださった方々、また文化学園杉並中学・高等学校の方々、本当にありがとうございました。

④ 国際基督教大学高等学校

一般生よりも帰国生の方が多い

教職大学院 社会科教育専攻SP 1年 平野 優人



当日は様々な教科・学年の授業を見学させていただきました。特に、歴史総合の授業が印象に残っています。「人権宣言」の日本語本文（翻訳）が掲載されたプリントには、英語本文に加え、日本語の読み仮名も付されています。

た。また、「所有権」という用語が出た際、先生からは、必要に応じて、意味を辞書で引くように指示がありました。国際基督教大学高校は一般生よりも帰国生の方が多く、日本語のレベルも生徒によって様々です。上記のように、教員が教材の工夫や授業内の配慮、少人数指導を行うことで、多様な背景をもつ生徒がのびのびと学習できる環境が整っていると感じました。また、国語、数学、英語の授業も少人数のレベル別で授業が行われており、誰もが安心して、それぞれのレベルに合わせて学習に専念できる環境が整っていました。他にも、難しい用語を扱う理科や社会では、日本語のボキャブラリーリストを配っているようで、授業内外において、生徒の学びが円滑に行われるようサポートが行われています。

この学校は、ユニークな生徒構成によって多様性を受け入れ、切磋琢磨し合う学校の特色をつくりだしていると言えます。例えば、帰国生の国・地域別でランチ会が行われることもあるようで、クラスや学年の垣根を超えた交流が活発な印象をもちました。また、地理や歴史の授業では、多様な背景をもつ生徒同士で学ぶことができるため、海外での生活や文化、歴史などについて活発な意見交換も期待でき、多くの生徒にとって刺激になると思います。国際基督教大学高校ならではの授業に、前向きに学習に取り組む生徒の姿を直接見て、授業をつくり上げ、研究し続ける教職の魅力が改めて感じました。最後になりますが、国際基督教大学高校の生徒の皆さん、教職員の方々、本事業を企画・実施して下さった全ての方々にご礼申し上げます。

⑤ ナノーガンコミュニティ中学校

「PULA！」

中等教育教員養成課程 理科専攻 3年 伊藤 美結



NANOGANG JUNIOR SECONDARY SCHOOL（以下、ナノーガン中学校）をオンラインで訪問させていただきました。生徒のみなさんや先生方の活気あふれる雰囲気は心打たれました。そして、私も「PULA」を心に刻んで忘れないようにしたいと思いました。

「PULA」という言葉は、ナノーガン中学校の先生の話の中で知りました。「PULA」は、文化的に深い意味を持つ言葉で、挨拶や好意、尊敬を表す言葉として使われると同時に、生命、祝福、繁栄、豊かさを象徴しているのだそうです。今回のオンライン訪問では「PULA」を感じる場面が多くありました。校内のイベントを紹介していただいた際には、ボツワナの伝統的な服装で参加する「Talent Show」など、生徒のみなさんが和気あいあいと参加しているイベントがたくさんあり、ナノーガン中学校の活気あふれる雰囲気が伝わってきました。そして、それらによって主体性や社会性が築かれているように感じました。校歌の有無を質問した際には、「校歌はないが学校内で共有している歌がある。」と、その場にいた生徒のみなさんが歌って紹介してくださいました。手をたたいて楽しそうに歌う姿、歌詞に込められた「与えられた環境を享受しよう」というメッセージに深く感動しました。また、先生方は、ナノーガン中学校が直面している人口過剰という課題に対し真摯に取り組んでおられました。国境に関係なくそれぞれの学校や教育機関が課題解決に向けて尽力している姿から、教育を通じた繋がりを感じました。

今回の学校訪問を通して、当たり前になってしまいつい忘れがちになっている学問を享受することのありがたみを忘れないようにしたいと思いました。私は、この学生生活や今後の教員人生において、与えられた環境を最大限に享受していきたいです。そして、教員となったときに、今まで周りの人に与えてもらっていたところを、今度は自分も生徒によりよい環境を与えられるようになりたいです。

附属図書館に 「教職支援コーナー」 (辟雍会支援) の開設

2024年8月に本学附属図書館に「教職支援コーナー」が開設されました。開設に当たっては辟雍会も支援しています。(関連した記事が辟雍会ホームページに掲載されました)



東京学芸大学附属図書館正面



入館ゲートを入ると左側に「教職支援コーナー」がある

「教職支援コーナー」開設記念・内覧会 (辟雍NEWS 2024.08.22)

去る8月19日(月)に本学附属図書館において、この度開設された「教職支援コーナー」の開設記念行事が、図書館1階にて行われました。國分充学長が挨拶の冒頭で、開設に際して辟雍会や東京学芸大学同窓会から支援があったことに対し、謝意を述べました。挨拶は川手圭一附属図書館長、鈴木聡学生キャリア支援室長が続き、最後に学術情報課員によるリニューアルした附属図書館の全容の紹介がありました。

「教職支援コーナー」には全国の教職試験問題(過去問)が並べられています。教職を目指す学生が開設を待たずにこのコーナーに足を運んでいたそうです。学生の関心の高さがうかがえ、学生のニーズに十分に応えたものとなりました。

近頃、図書館の様子は従来の静かな勉学の場というあり方にとどまらず、学生同士が議論し意見交換できる場という機能が加わり、学生の利用の範囲が広がっています。関係者が全国の大学図書館の現状を見聞し、将来、教壇に立つ学生の学びにふさわしい図書館のあり方を模索した結果が、案内されたコーナーの随所に見られました。

辟雍会の会員も大学に足を運んだ折には、ぜひ立ち寄ってみてはいかがでしょうか。入館ゲートを通ると左側に「教職支援コーナー」があり、学生が問題を解き、話し合っている光景を目にすることでしょう。

(小澤一郎 記)



ラーニングcommons (アクティブエリア、グループワークエリアなど)



全国の「教職試験の過去問」が棚に並ぶ

支部活動への支援

このたび、支部活動支援に関する規程が整いました。11月2日の全国代表者会議で承認された規程の中で、支援金の交付件数について運営委員会に託されていたところ、12月10日に次の通り「各支部毎年一件」と決定しました。今後の支部活動を支える一助となることが期待されます。

東京学芸大学辟雍会支部活動支援規程

(趣旨)

第1条 この規程は、東京学芸大学辟雍会(以下、「辟雍会」という)が、辟雍会の都道府県支部(以下、「支部」という)の活動支援を目的として、必要な事項を定めるものである。

(支部活動支援の内容)

第2条 支部活動に対する支援の内容は、次の各号とする。

- (1) 支部総会及び支部懇親会等への辟雍会役員の派遣
- (2) 支部設立活動の支援
- (3) 支部活動における通信費等の支援
- (4) 支部で企画する講演会・展覧会等に対する支援
- (5) その他、各種の支部活動に対する支援
- (6) 辟雍会刊行物等の送付
- (7) 辟雍会備品の貸与(辟雍会の旗等)
- (8) 東京学芸大学現役学生の支部活動参加に対する支援
- (9) 支部活動に資する各種情報の共有

(役員の派遣)

第3条 上記(1)号に定める辟雍会役員は、会長、副会長、もしくは理事とし、派遣の可否及び派遣者の決定は、その都度会長が行う。

(活動支援金等の交付)

第4条 上記(2)・(3)・(4)・(5)各号の活動支援金の交付は、各支部毎年一件までとし、一件につき5千円とする。なお、第(4)号に関連して、講師等の派遣や作品の提供等についても協議事項とする。

2 上記(6)号の刊行物は、次のものとする。

- (1) 機関誌「辟雍」
- (2) 辟雍会入会案内の小冊子
- (3) 東京学芸大学応援歌「若草もゆる」のCD
- (4) 辟雍会ネーム入りボールペン

3 上記(7)号の備品は、次のものとする。

辟雍会のネーム入り幟旗(10枚)

4 上記(8)号の学生に対する支援規定は別途定める。

(支援要請の方法)

第5条 上記の活動支援の要請は、支部より辟雍会会長に対して書式自由の申込用紙(ファックスまたは電子メールにファイルを添付することも可)により行うものとする。

2 要請の時期は随時とする。

3 採択の可否は、辟雍会運営委員会で決定し、その結果はすみやかに支部代表に通知する。

(規定の改廃)

第6条 この規程の改廃は、辟雍会の理事会の議を経て、辟雍会会長が行う。

(雑則)

第7条 この規程に定めるもののほか、必要な事項は、別に定める。

附則

この規程は、2024(令和6)年12月11日から施行する。

2024年度 各部活動報告

● 総務部

総務部は次の6項目を柱に、全体的な連絡調整を行っています。

- 1 全国代表者会議、理事会、幹事会の開催
 - ・全国代表者会議（2024年11月2日開催）
 - ・理事会（2024年5月25日開催）
 - ・運営委員会・幹事会（随時開催）
- 2 東京学芸大学との連携
 - ・大学との意見交換会（2024年6月13日開催）
- 3 既存の卒業生組織等との連携（総会・新年会等）
 - ・一般社団法人東京学芸大学同窓会総会（2024年6月9日開催）
 - ・一般社団法人東京学芸大学同窓会新年祝賀会（2025年1月19日開催）
- 4 新規会員の入会手続き及び名簿管理業務
- 5 辞職第21号、予算書、決算書、事業計画書等の発送
- 6 規程等の整備・見直し
 - ・旅費の支給に関する申合せ・会合費関する申し合わせの一部改正
 - ・東京学芸大学辞職会給付型奨学金に関する規程の制定
 - ・東京学芸大学学生の辞職会支部活動への参加を支援する規程の制定
 - ・東京学芸大学辞職会支部活動支援規程の制定

（総務部長 手塚 穰治）

● 会計部

会計部は予算の作成及び執行を中心に活動しています。

- 1 予算の適正かつ効率的な執行
- 2 2024年度予算の計画
- 3 的確な会計事務の実施

（会計部長 清水 研司）

● 広報部

広報部は機関誌の発刊を柱に次の活動を行っています。

- 1 機関誌『辞職』（第21号）の発刊
 - 印刷・製本2,500部（新入生・新卒業生・希望者）
- 2 大学行事での広報活動
 - 辞職会紹介リーフレットの作成（3,000部）

（広報部長 小澤 一郎）

● 組織部

組織部は会の組織拡大に努めています。

- 1 支部設立事業（京都府・山形県・沖縄県）
- 2 既存支部の総会、会合等と連携
 - ・2024年8月24日栃木県支部総会・2024年11月2日神奈川県支部総会及び2025年1月25日大分県支部総会に出席
- 3 卒業・修了生への記念品配付と既存支部の案内
 - ・2024年9月30日及び2025年3月19日配付

- 4 新入生未入会者への会費納入依頼
 - ・2024年7月4日に503通郵送、12月25日までに35名が納入
 - 5 リエゾンオフィスの管理
 - ・8団体（約2600名）が登録
 - 6 教職員への会費納入依頼
 - ・2025年1月に正会員手続きのご案内を配付
- （組織部長 二宮 修治）

● 事業部

事業部は年間の事業計画を実施し、在学生中心の新事業を構想中。

- 1 学生のキャリア支援事業
 - ・学生の辞職会学校訪問事業（オンライン含む）
（東京都私学2024年9月20日、埼玉県公立2024年9月26日、東京都私学2024年10月1日・10月8日、ボツワナ共和国オンライン訪問2024年10月9日）
 - ・教員就職支援事業
2024年8月1日埼玉県就職相談会開催
 - 2 会員支援事業
 - ・学生企画事業の支援
 - ・在学生のリエゾンオフィス登録団体設立支援
 - ・新入生歓迎事業学芸ロゲイニング支援
 - ・東京学芸大学辞職会給付型奨学金に関する規程の提案
 - ・東京学芸大学学生の辞職会支部活動への参加を支援する規程の提案
 - ・東京学芸大学辞職会支部活動支援規程の提案
 - 3 ホームカミングデー共催事業
 - ・2024年11月2日河添房江氏による「紫式部と王朝文化」講演会開催
 - 4 東京学芸大学辞職会創立20周年記念行事の支援
 - ・創立20周年記念祝賀会の開催
 - 5 キャンパス環境充実支援事業
 - 6 東京学芸大学辞職会修学支援金貸与事業
 - 7 構内共用ピアノ設置事業
 - 8 施設計画事業（調整中）
 - 9 コミュニティ広場保守事業
 - ・2024年6月水車の修理を実施
- （事業部長 荒川 悦雄）

● 情報化推進部

情報化推進部は会員からの情報発信により辞職会を盛り立てます。

- 1 ホームページの管理・運営
 - ・ホームページ掲載方法の統一
 - ・サーバー計画検討
- 2 オンライン会議の整備
- 3 リエゾンオフィス整備

（情報化推進部長 荒川 悦雄）



辟雍会事務所風景 (撮影者：アジア研究教室卒業生 布施絢子さん)

あとがき

本誌は辟雍会創立20周年記念号です。創立期に尽力された荒尾禎秀先生の特別寄稿、祝賀会における岡本靖正先生の祝言は本会の沿革にとって貴重な資料となっています。

戦争・紛争等で暗い話題が続く世界情勢のなか、パリで行われた五輪競技(オリパラ)における本学卒業生の活躍は一筋の光明でした。世界のアスリートをはじめ、困難の中にある多くの人々にとって、明日を生きる大きな支えの一つになったことでしょう。

先輩に続いて教職の世界に飛び込もうとする若い現役学生が、新鮮な目で学校の未来を見据えている姿は、教育界を覆う難題を力強く突破するエネルギーを感じます。

本会の会長職に再び登場した馬淵貞利会長は、現役生や卒業生、教職員の情報交換の場をさらに拡大しようと思案し、実行に移しております。本誌が会員同士のつながりをさらに強めるきっかけになれば幸いです。

小澤 一郎

東京学芸大学 辟雍会機関誌

Hekiyou

2024 vol.21

発行人 馬淵 貞利
 編集人 小澤 一郎
 編集協力 中西 史 井上 録郎 松川正樹
 本田 秀吉 大澤 一美 八木澤 弘子
 デザイン 正木 賢一メディアラボ
 印刷所 (有) サンプロセス



〒184-8501 東京都小金井市貫井北町 4-1-1
 20周年記念飯島同窓会館 2階
 TEL/FAX 042-321-8820
 E-Mail hekiryou@u-gakugei.ac.jp
 ホームページ www.hekiyou.com



②



①

のだて
野点の会 (2024年11月2日実施)・点描
 (撮影：アジア研究卒業 布施絢子氏)

- ①茶席の辟雍会関係者(雨天のため室内で実施)
- ②茶道具・水差し
- ③茶道部員の皆さん(右側：茶道部部長の富永さん)
- ④茶道具・茶釜 ⑤茶道具・短冊



③



⑤



④



[辟雍] 第21号 東京学芸大学辟雍会機関誌
www.hekiyou.com

